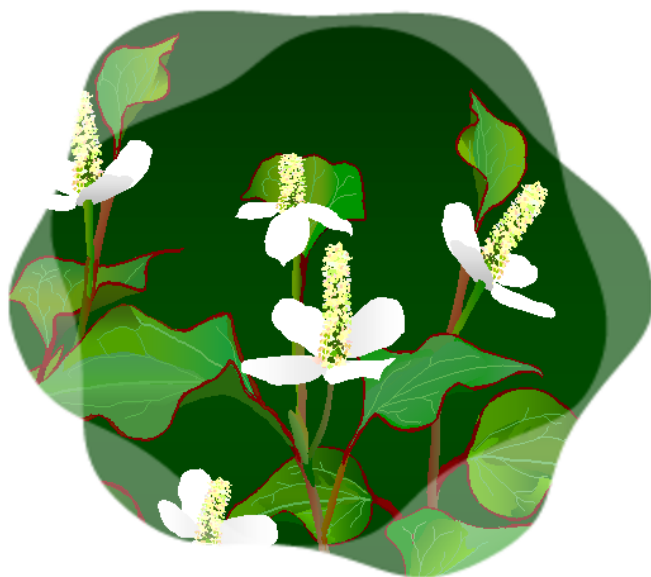


正・政・清・聖・性・醒

炉ばたセイ談



平成25年秋号

二十号を目指して

九号の原稿も大体集まりつつあると、中西編集長から一報がありました。

「とびら」を書くゆゑにこの仰せにしたがひ目下書いてゐるやうです。時は七月五日午後。昨日衆議院選挙公示四三三人立候補とのこと。投票票は一日。恐らく自公連合の圧勝でしょう。思えば前に「とびら」を書いた折も選挙がありました。何の選挙だったか調べれば分かりますが面倒です。選挙には行っていますが投票率がかんばしくないのは毎回です。大体結果がほぼ分かっているのでも半ば白けてゐるのと同じやう。

わい、十号も続けばうれしいと思つていましたが、すでに九号です。今は「きんぎょ」を手製の「セイ談」一号を想つて感無量ですが、人間は欲張りです。こうなる二十号を目指したくなります。新しい書き手が自ら現れるでしよう。

皆様との再会を楽しみにしています。

洪潮（重朝）記

序 「炉ばたセイ談」の生い立ち

桐野 二郎

「炉ばたセイ談」は「炉ばたセイ談会」（入来武家屋敷茅膏門邸）が一年に一回（八月）発刊する機関誌です。

「炉ばたセイ談会」は作家 歴史家であった故入来院貞子氏（一九三三—二〇一一）が所属する鹿児島ペンシルクラブで平成十三年に提唱、同クラブ代表の相星雅子氏ほか数名の会員がこれに賛同、他に新聞 テレビ関係者、高校・大学の教職員ほか地元の元町長などが加わっていた。き、入来武家屋敷の囲炉裏辺で「セイ談」を語り合う会としてスタートしました。

「セイ談」のセイは聖、清、正から醒、政、性まで、つまり話題は問わずお互いの夢を啓くという程度の、堅苦しくない会という意味です。

会は当初武家屋敷の一軒をお借りしてスタートしましたが、行政側の制度変更により借家制度が廃止された後、本拠を茅膏門邸、即ち入来院重朝、貞子ご夫妻宅に移して今日に至っております。機関誌「炉ばたセイ談」は入来院貞子氏が編集長となり平成十七年秋に創刊、第八号まで手掛けていただきましたが、貞子氏が同二十二年に急逝された後を承けて中西喜彦氏（鹿児島大学農学部名誉教授）が第十二号以後を担当（今日に至っております）。

本誌の内容は創刊号編集後記にありますように硬軟、左右なんでもありますが、執筆者には一家言を持つ会員も多いだけに、入来武家屋敷群の一角から発信されるこの小冊子が、いささかなりとも文化的な刺戟となり得ればと念じております。

「炉ばたセイ談」生みの親といってもいい故入来院貞子氏の願いも、祖霊の瞑るこの入来の地でびびやかながら、一隅を照らす灯を点したかったのではないのでしょうか。

（炉ばたセイ談会代表）

巻頭言 二十号を目指して 洪朝（重朝）記
序 「炉ばたセイ談」の生い立ち 桐野 三郎

目次

ブログより	百田 陽一	1
アベノミックス考	入来院重朝	22
隣国との関係	十五代 沈壽官	26
トルコの旅	江藤ヤエ子	31
母の三回忌によせて	山本 洋子	38
モクズガニ、その驚きの生活史	下土橋 渡	43
宮沢賢治と法華経	宮下 亮善	48
濡れた仔馬のたてがみを	福元 忠一	54
大宮神社	福元 忠一	58
鹿児島大学入来牧場の紹介と今後の課題		
	中西 喜彦	61
瀋陽の警官は笑顔と共に「アリガトウ」と言った		
	澁谷 繁樹	77
時の過ぎ行くままに（3）		
「炉ばたセイ談」にかけた貞子さんの夢		
	桐野 三郎	83
編集後記	編集担当	96



庶流入来院家茅葺門

ブログより

百田 陽一



今回もブログ「I Z A！」に出した世迷いごとの中から出稿することをお許しくください。アクセス数は5月21日現在で約9500です。

○ずれる日本、安倍政権

(二〇一三年五月十五日)

アベノミクスですか。一つテレビ報道で気づいたのですが、スバル、富士重工の車の販売がすこぶるいいのもアベノミクスの一つとして紹介されていました。しかし、これは違うでしょう。私が気づいた具体的な例として言えば、群馬かどこかの富士重工の工場は大分

前から繰り返し、短期従業員を募集しているのを朝日新聞の求人広告でみていました。これは相当に忙しいのだなと思いました。マイカーをある板金業者に車検に出した際、その従業員と立ち話になり、富士重工のある車種がアメリカで物凄い人気で売れていると、説明してくれました。しかし、その富士重工も結局、内実はトヨタ資本に組み込まれつつあるそうです。兎に角安倍登場のかなりまえから富士重工の車はその性能を買われてでしょうが、大人気なのです。

アベノミクスの実態はなんなのでしよう。お金を思い切つてふんだんに市場にばらまくことですか。あのバナナのたき売りが似合いますか。あの日銀総裁、黒田とか言う、あのおっさんがやっていることは何ですか。アメリカのFRBのバーナンキの真似をしてるだけと違いますか。円安で株高となり個人投資家が

株に関心を寄せ始めていますが、いずれ大きな損失を被るのが落ちでしょう。最近、朝日新聞に内田樹（たつる）氏が寄稿していましたが、ケネディの有名な演説をもじって「グローバル企業が君に何をしてくれるかではなく、グローバル企業が君のために君が何をできるかを問いたまえ」と言うことである、と喝破していました。要するに国民、国家にあれもしてくれ、これもと要求し続け、実態は海外に移転し、無国籍企業化している大企業とは何なのか。来年度の営業利益が1兆8000億円というトヨタ自動車。それがどうしたの？すこしは国民にそのお裾分けが及ぶの？ありえないでしょう。以前、愛知万博へロータリークラブの仲間とでかけた際、東海地方のロータリアンにトヨタの評判を聞いたら決して芳しいものではありませんでした。地味な社風、それはそれでいいでしょう。しかし、

あれだけの大きな企業になったトヨタが企業として社会貢献も熱心にやっているという雰囲気は全く伝わってきません。まあせいぜいアメリカでもどこでも車を売ってもらうてください、と国民の一人としては醒めた目で見つめるしか手がありません。

話はがらりと変わりますが、韓国の朴大統領がオバマ大統領と膝詰で話し合っているシーンをテレビ報道で見ました。オバマさんは本気で、朴さんと語り合っていた。しかも楽しそうに。しかし、先だつての安倍さんとのとき、オバマ氏の顔つき、どこか戸惑いがあり、虚ろな感じがしました。明らかに朴と安倍では違いました。もちろん、オバマ氏が正しくて、気に入ってもらわなければ、だめだなんてこれっぽっちも思いません。オバマ氏にとつて話すに値する相手かどうかの差だと思えます。朴さんとは北朝鮮問題が差し迫っ

ていましたが、それだけではない、と思えます。話し合うにたる相手だったからでしょう。安倍さんはどうか。いまごろ集团的自衛権なんか持ち出しても、世界の動きとずれまくっているのです。

アメリカは中国と向き合って何とか、世界ナンバー1の地位を保ちたい、それが最大の関心事でしょう。しかし、その願望もかなり雲行きが怪しい、と言うのが正直なところでしょう。そういう大状況の中で日本は自らの真の国益と、アジアの平和、発展にどう取り組めるかを自らの足で情報をセンスし、アメリカのためなんかではなく、日本独自のスタンスを確立して前に進むべきでしょう。そうすれば、アメリカもそれを評価し、協調していくことになるかも知れません。



○負担軽減？

(二〇一三年四月六日)

負担軽減という言葉を聞くたびに、怒りとむなしさがこみあげてくる。沖縄の米軍基地問題。今日2015年4月5日に安倍首相とルース米国大使の間で普天間基地と沖縄南部に点在する米軍基地の返還計画が明らかにされた。いずれも9年後かまたはそれ以降になど、と言う期限を発表したのだ。ついこの間の民主党政権時には、普天間基地の移転と切り離してそれ以外の5か所ぐらいの基地は早期に返還することになっていたはずだが、自民党が政権に復帰したためか、そんな話はないことになり、普天間の辺野古への移転が実現したら南部の諸基地を返還するという具合に後退した。

これは何なのか。米国、米軍の言うことをそこまで聞かなければならないのか。この後

退の背景には、むしろ日本側にあるような気がしてならない。つまり外務省は沖繩の基地返還なんかどうでもいい、それより日米同盟にひびをいれるようなことは極力さけるべきだ、という悪名高い腰抜け外交で知られているからだ。事実その通りの存在だ。だから負担軽減という言葉を平気で連発する。民主党政権もこの点では、同罪だった。

つまり完全にその他の基地返還は、普天間移転の取引材料に使われ始めた。さらに、那覇空港の滑走路をふやすことも普天間移転と絡めている。きたない。やり方が。つまり同じ日本人でも沖繩人と本土の日本人とは明白な差別のラインが横たわっている。これは今に始まったことではない。島津の琉球処分から、つまり薩摩藩が琉球王国を植民地にして中国との交易のあがりを搾取し、黒砂糖などの物産からも巨利を得て、それが幕末の薩

摩藩の原動力となり、明治維新へとなだれ込んだことは疑うべくもない歴史的事実なのだ。かくして沖繩県民、琉球人の苦難はつづきそうだ。しかし、だからこそ、仲井真知事は決して辺野古の埋め立てを認めることなく、辺野古の海を、沖繩の自然を、守って欲しい。本土の日本人もこれを支援することは当然だと思っ。

○初めて千鳥ヶ淵へ

(二〇一三年三月二十五日)

大方の天気予報で先週の土曜日、3月23日が東京の花見のピーク、つまり満開と言うことで、初めて花見の聖地、千鳥ヶ淵にでかけた。テレビニュースの花見の定番の場所なので皇居の周囲を回ればわかるだろう、まず靖国神社に行こう、と地下鉄半蔵門線の九段下で下車、すし店で腹ごしらえをしたあと、

歩き始めた。すでに歩道は花見客でいっぱい。靖国神社にいくまでもなく、すでに千鳥ヶ淵に足を踏み入れていた。さすがに濠端に連なる260本の桜は見事だった。

携帯電話で写真を撮ったりしたが、ふと、千鳥ヶ淵と言えば、無名戦士の墓があるはずだ、と思い、雑踏警備のガードマン氏にその場所を聞いても要領を得ない。やっと何度か場所をたずねながら「千鳥ヶ淵戦没者墓苑」に辿りついた。1本100円の菊の花を白と黄の2本買い求め、祭壇に献花して手を合わせしばし合掌。

かなり多くのひとが墓苑に訪れ、同じように合掌しては立ち去っていた。しかし、圧倒的に大勢の花見客はこの墓苑に気づくこともなく、通り過ぎていた。それを非難するのは酷かも知れない。墓苑の説明板によると、太平洋戦争、日中戦争でなくなった兵士、軍属、

一般邦人とみられる無名の遺骨が祭られているそうだ。アツツ島からモンゴル、インド・ビルマ（ミャンマー）、パプアニューギニアに至る広範な地域でご承知の通りわれら日本人の同胞は死んでいった。その数240万人。

終戦記念日などでこの墓苑はニュースで取り上げられる。しかし、せっかくいい場所にあるこの墓苑をもっと広く国民は訪れ、自らに問いかける場、そんな意味での聖地にすべきではないだろうか。政府も参拝すれば、中国、韓国とすぐトラブル靖国よりこの墓苑をもっと重視して国民が沈思黙考する場にすべきではないか。ハワイを訪れたとき、私は真珠湾（パールハーバー）に最初にでかけた。旧日本軍により撃沈された戦艦アリゾナの艦上にしつらえられた戦死者を刻した名簿板に見入ったものだ。その送り迎えは米海軍のラウンチが公務として行っている。近くの軍人の

墓を観光バスで訪れた際も乗客をバスから降ろさせず、バスから静かに墓を見守った。そこには戦死者を弔う国家としての責任感に感じ出していた。この点は米国の方が立派と言わざるをえない。もっともそこをないがしろにすれば、移民で成り立っているあの国は持たないとも言える。

○ゼロ・ダーク・サーティ

(二〇一三年三月十四日)

これは最近、上映されたアメリカ映画のタイトルです。どんな意味かと言うと「深夜0:30を指す軍事用語」だそうです。で、その時間がどうしたのかというと、オサマ・ビン・ラディンに対する捕縛作戦の決行時間です。作戦の暗号名はジェロニモ。アメリカ大陸の先住民の酋長の名前ですね。どこか懐かしい。そう、こんな先住民を殺戮して現在のアメリカ

カ合衆国はあるのです。

タイムの2月4日号にこの映画の監督、キヤスリン・ビグローの特集(リリー・ローズマン)が掲載されていました。それによると、ビグローさんは、スリムで身長は180センチ超で、黒いセーターにジーパン姿。61歳だが、驚くほど若い、そして温かい優雅さがないじみ出た女性。前作はハート・ロッカーと聞けば、なるほど、と言う感じ。

映画の内容は、マヤというCIAの女性分析官が、いろいろ苦労した末、ビン・ラディンの居所を突き止める。すぐにはこの情報は受け入れられず、やっと2011年5月、パキスタンのアボタバッドの隠れ家を米軍の特殊任務部隊がヘリ2機で急襲、ビン・ラディンを殺害、死体をヘリに積み、作戦成功という歴史的事実を再現したものだ。冒頭の30分近くはCIAの仲間がイスラム教徒を拷問し

て情報を聞き出そうとする場面の連続でかなり気分が悪くなる。圧巻はやはりビン・ラディンの殺害シーン。確かにこのようにして殺したのだから、と説得力は十分。しかし、わたしの脳裏にかすめたものはパキスタンの雑踏の中を携帯電話の電波を頼りにビン・ラディンの家に入り込んでいる男を追うシーンのその雑踏、つまりアジア的な混沌がもつエネルギーギッシュさの魅力でした。また、車を運転するマヤが宿舎近くで襲われそうになり、やっと宿舎に逃げ込むシーンで、その車がトヨタのマークがついており、今私が乗っているベルタのようだ、というつまらないことが気になりました。ビッグロー監督も映画を観た人それぞれが何か感じ、考えてくれればいい、ということのようです。

ビン・ラディンの遺骸の映像を見つめるオバマ大統領らトップ。その一人の当時の國務

長官・ヒラリー・クリントン氏の口を手で覆うようなシーンが印象的でしたが、結局、アメリカはビン・ラディンを殺害したことで問題は解決した、とはまさか思っていないでしょう。日本人一〇人が殺害されたついであいだのアルジェリアの事件を引き合いに出すまでもなく、ビン・ラディンの存在、影響力は生き続けるに違いないからです。

○ケリー&ヘーゲル

(二〇一三年二月二十二日)

2日付の朝日新聞によると、2期目のオバマ政権を担う國務長官にジョン・ケリー氏が国防長官にチャック・ヘーゲル氏がそれぞれ就任する。二人に共通しているのは中国重視だ。「中国が興隆し、地域全体も成長している。最大の機会と挑戦がある地域に関与しなければならぬ」(1月31日の上院軍事委員会

ヘーゲル氏」という理由に尽きるだろう。二人とも率直である。

一方のケリー氏も1月24日の上院外交委員会で、中国の軍拡路線への対抗策として米軍が進めるアジア太平洋地域での態勢強化については「私はまだ、不可欠だとは確信していない」と慎重だ。さらに、中国からみたら、「米国は我々を困い込もうとしているのか」と言うだろう。我々は思慮深く進まなければならぬ、とさえ言っている。

ヘーゲル氏は1月31日の公聴会で、共和党上院議員としてイラクの米軍増派に反対したことを問われ「あの政策は、我々が戦場に送った男女の命に値しただろうか」と判断の正しさを力説した。

二人ともベトナム戦争に従軍、ケリー氏は民主党上院議員で04年の大統領選挙で、ブッシュ前大統領に敗れた。ヘーゲル氏は元共

和党上院議員だが、ブッシュ前政権のイラク政策を批判した。この二人が言っていることはまともだ。この二人に仕事をさせるオバマ氏も2期目の在り方はかなり違ってくるのではないだろうか。安倍政権にこの変化にいい意味で対応できる力量があるのだろうか。潮目が変わろうとしているのに日本は旧態依然たる日米安保重視の一点張りで、なんの芸もなく、世界の動きから取り残されるのが一番怖いことだ。自民党大丈夫か。民主党をなじるだけではすまない。レベルを上げて世界を相手にした外交を展開してもらいたい

〇ああ999円!

(二〇一三年一月二〇日)

999円って何の値段? 600リットルのウイスキーの値段です。高くないですよ。いや、安いですよ。最近、私が飲んでい

ウイスキーの値段です。

つい数年前の現役のころは、国産のウイスキーでも山崎とか、あとはお決まりのオールドパー、シーバズリーガルなどを家で寝る前などに飲んでいたものです。しかし、年金生活の身にはそんな酒、飲む気にもなりません。そこで出合ったのがこのウイスキーなのです。

この酒、キリンの富士山麓です。こないだまで九州にいたのですが、この銘柄知りませんでした。なぜ知ったのか？生麦事件って知っています。幕末に大名行列の邪魔をした、と言うよりよく事情も知らず、行列に敬意を払わなかったイギリス人の馬に乗った男を薩摩の示現流で切り殺した事件です。結局、これが薩英戦争につながった出来事です。

この事件現場が今住んでいるところからそう遠くないので、見学に出かけました。旧東海道沿いに殺傷現場とこの男が馬で横浜側に

数百メートル走ったところで落馬し、絶命した現場を見てきました。いずれも看板や記念碑があるだけのものでしたが、やはり日本の行方に大きな影響を及ぼした事件だけに一度は訪れてみたかったわけです。そのあと近くの喫茶店に入りました。そこで店の棚にあったのがこの富士山麓でした。夕方だったので軽食とともにこのウイスキーを2杯飲みました。

近くにキリンのビアガーデンもあるそうで、その関係もあってかこの酒が置いてあったのでしょう。生麦事件についてはまた、別の機会に詳しく触れたいと思います。とにかくデフレ時代を生き抜くためには、見栄を捨て、一円でも安いものを買うそんな癖がつきそうですね。



○自動車ぶったくり税、すぐに廃止を

(二〇一三年一月十二日)

自動車取得税と自動車重量税。いわゆる強制保険の自賠責それに任意保険。ガソリンを買えば、法外なガソリン税。車を所有するということは、この日本という国家では大変な負担を迫られる。

都会のサラリーマンは車を持たない方がいい。これに駐車場代がかかるから。よほどお金に余裕がある人、あるいは仕事でもたないと極めて不便をかこつ人は持つだろう。しかし、地方では車を持つと便利だし、使い勝手もいい。さらに、限界集落と呼ばれる山間部では車の存在は死活問題とさえ言える。

で、自民党の自動車議員連盟が10日の総会で自動車取得税と自動車重量税を消費税率が8%に上がる来年4月までに廃止することなどを決議した。茂木経済産業大臣もこの二

つの自動車関連税を廃止すべく財務省と話し合うと言っている。一方、保険業界からは自賠責の支払いが増えていることを理由に15%もの値上げを主張している。待ったなしであげるにちがいない。われわれ庶民のユーザーは、取得税などが廃止されないと、車を手放すケースが増えそうだ。特に、首都圏などで。

自動車業界は当然そういう危機感を持っており、その意を受けて自民党は動こうとしているのだろう。この際、自民でも、民主でも構わない。とにかく、取りすぎの税金を廃止してくれ。取りやすいところから取る。という安易な税体系に財務省はいつまでかまけているつもりか。重量税は地方の税金になるので、総務省が難色を示すなどこの問題はどうか転ぶかわからない。

それにしても民主党はこれらの自動車関連

税のどれかを実現しておけば、選挙の結果も少しは違っただろうに。テレ朝の人気番組、「相棒」の杉下右京風に言えば「野田さん(前首相)は財務省の puppet (傀儡、あやつり人形)だったので、手をつけられなかったのでしようねえ」ということでしょうか。

○安倍さん、何を急ぐんですか？

アメリカ行きを(二〇一三年一月八日)

安倍晋三首相のアメリカ訪問がうまくセツトできないようだ。首相就任前の昨年12月18日のオバマ大統領との電話協議で1月中にはアメリカ訪問をと意気込んでいた首相だが、いざ日程を詰めると、1月、つまり今月中の訪問はむずかしそうだ、という。

新聞報道によると、外務省の河相周夫・事務次官が7日にも安倍外交の説明と日程調整のため、訪米するそうだが、そんなことはワ

シントンの日本大使館にやらせれば、すむことでしょう。大体、財政の崖問題で苦しんでいたオバマさんは21日に就任式とか。日本の何ら進展も重要な懸案もない指導者にあいさつ、顔見世程度の訪問に付き合いたくないのが向こうの本音だろう。駐米日本大使館はその辺の事情をなぜ直言しないのか。さらに、朝日新聞の7日朝刊によると、外務省幹部は「大統領は会談で具体的な成果を望んでいる」としているそうだ。この発言のニュアンスはわからないが、「だから急いで行くな」と言いたいのなら理解できるが、アメリカ側の気持ちを付度して具体的成果、これはTPP参加問題と普天間の移設問題を指すようだが、お土産に持参しないと、会いたくもない、という意味を示唆しているのなら許しがたいことだ。

民主党が日米関係を悪化させた、それを一

日でも早くお伺いして怒りを収めてもらおう、というのが安倍首相の思いだとすると、そんな奴隷根性をあなたはまだ続けるんですか、と言いたい。あなたの祖父、岸信介・元首相は60年安保闘争で敵役を演じ、悪の代名詞みたいなしばらく言われたけれど、最近、何かで聞いたが、じつはアメリカが警戒し、嫌がったそうだ。あなたの祖父は。何の問題についてかは忘れたが、つまり岸信介も骨がある面をもっていた、ということだ。安倍さん。何かお土産なんていつまでも日本の代表者が言っているのはダメ。そうではなく、率直に日本の方向性について語り、協調できる点については一緒にやって行こう、と論じ合いなさいよ。真剣に。へらへら意味不明の笑顔をかべるのではなく。そうすればオバマだって真剣に話すはず。だから訪米するのはいいが、それは時期の問題ではなく、訪問するにたる

内容を語り合えるかどうかにかかっているということですよ。

○嘉田さん、このまま瓦解ですか？

(二〇一三年一月五日)

嘉田さん、このまま国政から遠ざかるつもりですか。それはあなたに卒原発を実現してくれる、と大いに期待した人々を裏切ることになりません。必ず出番は来ます。執拗に反原発を貫いてください。それにしても近江の国の人たちは、心が狭いですね。わが知事が国政でも一石を投じるのを応援してもいいのではないのでしょうか。

もつとも二足のわらじが上策かどうかは、確かに疑問ですね。知事の任期切れとともに知事を辞職し、参議院議員に立候補して当選を目指してください。

嘉田というカードを切った小沢さんの感

覚は、やはり凄いですね。しかし、余りにも時間がなすぎた。原発の可否が選挙のメインテーマにはならなかった。それはやっぱり、景気回復、雇用の回復が差し迫った問題です。これは今回に限ったことではありません。小沢さんの窮余の一策が不発に終わったということでしょう。そして惨敗。そして何があったのか、党の分裂。辞任表明。冷徹な政治の有り様は善良なる国民にはついていけません。それでも原発の先頭に立つ政治グループとして地道に活動を続けてください。嘉田さん。国民の少なからぬ層はそれを待ち望んでいません。

○タカ派路線を封印、現実路線ですね

(二〇一二年十二月二十二日)

安倍総裁、なにかと矢継ぎ早に手をうちますね。首班指名という通過儀式を待たずに必

要なことをやる、というのはいいことですね。韓国に初の女性大統領、パク・クネ氏が登場するや竹島の政府記念式典を来年はしないことに決め、日韓議連の額賀福志郎元財務相を韓国に派遣することを表明するなど野田政権とは大違いですね。野田さんは消費税で身も心も奪われ、外文どころじゃないちゅう感じ。また、下手に対ロシアの領土問題などに着手して欲しくない感じすらあったですね。

安倍さんは選挙まえの大上段に構えた右寄り路線には、当面、踏み込まず、常識的で大方の賛成を得られそうなソフトでしかも機を逃さない、ある意味理想的な路線を走るのかのような期待を抱かせますね。もちろん、いつ牙をむくかは、わかりませんが。

片や日本未来の党の嘉田代表はというと、社民からきた阿部知子氏を共同代表として起用することを検討しているそうだ。女性代表

の双頭作戦いいんじゃないでしょうか。それと滋賀の知事は辞め、参議院選に出て国会議員になった方がいいでしょう。民主の代表選びは難航しそうですね。ここはもう岡田副総理をズバリ選んで、息の長い地道な取り組みをするべきでしょう。

○民主はなぜ大敗したのか。

(二〇一二年十二月十九日)

民主の落選組が野田さんの解散時期が大敗の原因だ、と言いついていたのは醜かった。これは岡田副総理が言っていたように「解散の時期が問題ではない。選挙は議員の自己責任だ。他人に責任を転嫁できるものはない」と言うような主旨の発言が正しいと思う。

鳩山、菅、野田の3人の首相に共通して感じたのは、首相補佐官というか、側近のブレ

ーンがきちんと機能していなかったことだ。首相のそばに立ってテレビカメラに映っていればいい、というものじゃないだろう。でも、側近を責めるよりもそういう布陣をよしとした、首相本人のやはり責任だろうか。もっと学者を含めて広く人材を吟味すべきだろう。

野田さんは消費税さえ実現できればいいという確信犯だったのだろうか。真の意味で情報公開をしなかった。国民なんてどうでもいい、という感じ。それに米国にたいする服従ぶりは酷かった。自民党でもここまでなかった。落選後、藤村官房長官は「みなさんに理解していただけなかった」と言っていたが、その通り。率直さに欠けていた。自分たちはそんなつもりではなかった、といっても通用しない。それでも民主党よ二大政党の一翼を担う政党としてぜひ立ち直って欲しい。国民はそれを期待しているはずだ。

○続・民主党大敗のわけ

(二〇一二年十二月十九日)

もうさんざん指摘されていることだが、だからだと民主のまづかった点をあげつらうとまず、マニフェスト総崩れ。しかし、よく考えてみると、選挙の際の公約を守らない、果たさないというのは日本のある意味、常識だったのじゃない。それをマニフェストという言葉をつかうと、絶対守らなきやという感じになるのは少し、違うのでは。manifestを辞書で引くと、「明示する」という程度のことです。「*を積荷目録に載せる」という意味もありもつと軽い感じだ。アジェンダという言葉を繰り返すアジェンダおじさんの渡辺みんなの党代表ともども意味がしっくりと伝わらない外国の言葉遊びは有害な気がする。

でもそのマニフェストの中で、子ども手当や農家への戸別補償は秀逸だった。農協もこ

れには困っていたはずだ。子ども手当は文句なしに歓迎されていたはずだ。だからこれが金額を大幅に減らされ、おかしくなったとき母親や父親たちはもつと声をあげるべきだった。ドライブーにとつて朗報だった高速道路の無料化、ガソリン税、自動車重量税の二重取りをただそうという試みなどいいところを突いていたのに生煮えになって結局、政策を貫けない政党という印象だけがのこった。事業仕分もことの成否は別としていい試みだった。これらのうちどれか一つでも初志貫徹しておれば、有権者に強いメッセージを刷り込めたのに残念だ。

小沢切りがやはり大きな分岐点だった。よくわからない裁判を抱え、苦しんでいた小沢氏にたいして冷たい仕打ちだった。小沢氏の身から出た錆という面もつよくある。彼の問題点はもちろんある。それでも彼を切ればい

いんだ、という思いに追い込まれ、それが結局は民主の命取りになった。そのあともただらと離党者が続いたのでは、有権者が素直に民主を支持できなかったのも当然だ。まさに解党的というより解党寸前に追い詰められた党の再生にいかに着手するか、辛くて凍てついた道のりが民主の前には広がっている。

○December 2012 General Election?

(二〇一二年十二月十五日)

すったもんだの末、実現した総選挙。投票日もいよいよ明日。メディアの報道によれば、自民圧勝は動かないようだ。自民単独でも過半数の勢いというから、それに公明が加われば、衆院の覇権は完全に自民の手に。この際圧勝してもらった方がいいかも。自民が膨らめば、分裂するのは事の道理だろう。すでに安倍総裁と石破幹事長の中はすつきりし

ていない風。あんな右傾化路線で国民はついていくのか？選んだ有権者、とくに、若い人が多いといわれている。小泉さんのときにも若い人が熱狂的に支持した。そのつけはどうだったのかぜひ吟味してもらいたい。しかし、この失われた20年はまさに若い人たちにとって厳しいものだった。そしてそれはまだ、続いている。60年安保、70年安保のときだったら恐らく革命とまでいなくても暴動が起きていただろう。しかし、その後私たちが日本人は牙を抜かれてしまった。そして今がある。

余りにも一方的な結果になれば、夏の参院選で揺り戻しがあるだろう。公明党もこれだけの右傾化路線を自民が突っ走れば、ついていけないはずだ。かくしてまた、不安定な政治状況が続く。原発反対の日本の未来は惨敗しそうだが、そこから立ち上がってなんぼの

世界だ。女性党首に期待したい。では16日の審判を今は静かに待ちたい。

○真珠湾攻撃から七十一年目ですか

(二〇一二年十二月八日)

千島列島の単冠湾に集結した日本帝国の連合艦隊は、日米交渉が決裂した場合は開戦ということ、発進し、案の定日米交渉が決裂したため、1941年12月8日(日本時間)米国のハワイ・オアフ島の真珠湾に突入(米国時間では12月7日)、戦艦「アリゾナ」などを撃沈させた。日米間の太平洋戦争はかくして始まった。

チャーチルの「第二次世界大戦」(The Second World War)によるとこうだ。ラジオをつけたらすぐに9時のニュースが始まった。ロシア戦線や英軍のリビア戦線のニュースが流れ、最後にハワイでアメリカの船が日本に

よって攻撃された。また日本は蘭領東インド諸島で英国の船を攻撃した、というニュースが流れた。すぐにチャーチルは米国のルーズベルト大統領に電話した。「大統領、一体、日本はどうしたんですか？」とチャーチル。「その通りなのです。きやつらは真珠湾を攻撃したのです。我々はいまや同じ船に乗り合わせているちゆうことです」。さすがに大英帝国のチャーチルだけあって大喜びなどしないが、その抑えたタツチに彼の内心、「ああこれで大英帝国は救われた」という気持ちも伝わってくる。

アメリカも英国も真珠湾攻撃については全く知らなかったというわけだが、これはまだ歴史上のミステリーとしてこれからもいろんな議論が交わされそう。ただ、状況証拠的に言えるのは、米国は、ルーズベルトはナチスドイツに苦しめられている英国を助けるべ

く欧州戦線に参加しなかった。しかし、議会在簡単には参戦を認めない。中国で泥沼の戦線に引きずりこまれている日本を戦争に誘い込めば、日独伊三国同盟との関連で欧州戦線にアメリカは参戦できるかも知れない、と大統領が考えてもおかしくはない。この辺は事実どうだったのか、これからの研究に委ねたい。(筆者注・ルーズベルトの責任は日米戦争はなぜ始まったか、チャーلز・A・ビアード著を筆者は現在読んでいるところです)

この戦争は原爆投下と言う人類にとって恥ずべき所業によって終わった。しかし、アメリカは自らの所業のひどさを顧みもせず、いまだに日本に請求書を送り続けている。それは日米安全保障体制であり、その細かい一部として地位協定がある。沖縄の基地がある。オバマ大統領はアジア重視に舵を切ったという。それってなに？要するに欧州の経済はだ

めだし、中東は難しいし、南米はほとんどがアメリカ嫌いだし、結局世界の成長地域のアジアしかない、その成長ぶりに落ちぶれたドル帝国はさすがにかなってことでしょう。それを米国がアジア、日本を重視してくれているのではないか、と言った日本の論調は本当に情けない。アメリカがどうこうじゃなくて、日本はどう生きるべきかを考えるべきだ。アメリカは最終的には日本のことなど考えていないし、また、そんなことをアメリカに期待するなんて最低の国家だと思ふ。かくして日本は総選挙の最中なのであります。合掌。

○解散に踏み切ったドジョウ首相

(二〇一二年十一月十五日)

解散の期日は明示しないという鉄則を無視した野田首相の16日解散宣言は、正直言っただけ肝を抜かれた、と言うのが大方の印象だ

ろう。週末博多でラーメンをうまそうに胃袋に入れていたその勢いだろうか。いや、博多に行く時点で腹を決めていたのではないか。

とにかく14日の午後、国会の党首討論は久しぶりに政治の醍醐味とその厳しき、決断と言うようなことを十分に感得させられた。

現職首相の決断はやはり迫力十分だ。思えば、興石幹事長がけんもほろろに首相との会談から出てきたときにこの解散は決まっていたのだらう。その翌日の民主党内に早期解散に反対の意見多数と言うのは、ガス抜きにすぎない。この選挙で自民が勝つか、民主が持ちこたえるかはわからない。しかし、いわゆる第三極がクローズアップされすぎるような子供の時間は過ぎ、いよいよ戦争に突入で、待つたなしにその結果は12月16日に出る。望むべきは事ここに至っては民主党内まとまって選挙に臨むべきでしょう。TPPを心配す

る山田議員もここらで矛をおさめてはいかがでしょうか。

○醜悪なオスプレイ

(二〇一二年六月十六日)



オスプレイが普天間に配備されると聞き、アメリカの無神経さにいささか唾然としていた。モロッコで墜落、その原因調査も待たず、配備受け入れを表明していたのが新しく防衛相になった森本敏さん。これには愕然とした。

議員でない民間人が防衛大臣になるのはいかなものか、と言う懸念が話題になったが、私は民間人でもいい、と思う。それよりアメリカの言うままになるのが、日米関係の深化と信じているその浅さ、品のなさが我慢ならぬのだ。それは防衛大学出身だから前任の田中さんより防衛とそれを取り巻く問題に通

暁しているのは当然だろう。確かに田中さんには至らない点が多かっただろう。しかし、それはかれをこのポストに選んだ首相の方に責任がある。田中から森本へ。こう言うのを「羹に懲りて膾を吹く」とでもいうのでしようか。ちよつと意味が違うかもしれないが、野田首相の場当たりの対応もこれまた品がない。

そこへフロリダ州でオスちゃんまたまた墜落事故。乗組員5人は命に別状ないそうだが、空軍は墜落現場に危険な物質が残留しているおそれありと警告（15日朝日夕刊）。なにやら怪しい。こんな欠陥軍事製品を堂々と世界中で乗り回そうと言うアメリカの神経を疑う。この世界一の大国のいろんな意味での劣化は、深刻だ。

その夕刊記事によれば、藤村官房長官はこの事故を受けて沖縄への配備計画の見合わせ

をアメリカに要請はしない、と明言。一方で「米政府にできるだけすみやかな情報提供をもとめており、その間は配備に向けた手続きを当面留保する」と説明。なんのこっちゃ、結局、当面見合わせますよ、とアメリカに言っているわけだ。なんでもっと率直に、こんなに事故続きでは、配備は難しい、といえないのだろう。アメリカへの配慮が優先し、われわれ善良なる、おとなしい国民にアピールする必要はない、とこのとっちゃん坊や風の官房長官は考えているようだ。今の民主党政権、野田政権の勘違いぶり、結局国民をなめきっている態度、本人たちは全くそうは思っておらず、民意を大事にした謙虚な政権と信じているから始末が悪い。

森本さんの話だったですね。いずれこの仁もボロを出すだろう。論じるに値しない。沖縄の仲井真弘多知事は宜野湾市長とともに上

京して配備撤回を政府に申し入れるそうだと。当然だろう。いつもつらい目に遭っている沖縄の指導者に気の毒に思うが、これに反対せず黙って受け入れたらこれまで積み上げてきた沖縄の反基地への取り組みはなんだったのかと問われかねない。野田さんはオスプレイどころではない修羅場を迎えそうで、それについては次のブログで。

○続・醜悪なオスプレイ

(二〇一二年七月二日)

前々回の小生のブログ(6月16日)の醜悪なオスプレイで指摘したことがやはり現実のものとなり、この問題はこれから論議を呼ぶ。

森本氏を防衛相に選任したときからこのような悲惨な、お粗末な仕儀に相成ることは見えていた。このおっさんは(森本氏)は全く

政治的な感覚など期待できない人物だ。ひたすら日米安保が最優先と言っていけばいいという御仁だからだ。しかし、これは選んだ方が悪いと指摘していたら7月1日の朝日三面で野田首相は「なんとと言っても日米安保が軸だ。米国がアジア太平洋地域に回帰している動きは歓迎すべきことだ」とのたもう始末。本気で思っているの。アメリカが東アジアから疎外されるのを一番恐れており、それに助け舟を出したつもりなの。

信頼していない玄葉外相ですら「米側に言うべきことを言った方がいい」とこのオスプレイ問題で主張したというのに、野田さん、あなたはだめだね。沖縄県知事や普天間の宜野湾市長が本気で配備反対しているのをどう考えるの。これ以上沖縄の傷の痛みに平気で塩をこすり付けるの。その感覚のひどきは正視にたえられない。

(元KKKB専務)

アベノミクス考

入来院重朝



アベノミクスの是非について最近株価が五月五日の高値一五、九四二円から黒田日銀総裁の異次元金融緩和と政策発表の四月四日当時の一二、八七七円まで急降下したのを見て、マスコミ等は騒いでいます。株価が乱高下するのは当たり前であり、今まで一本調子で上がってきたのですから、ここらで一先ず一服したのだろうと私は思います。

さて、アベちゃんとかれば思い出します。当誌三号に「百歳とともに」を私のセイ談として掲載しましたが、そこで彼をトッチャンボーヤだなど思ったと書いたのを確認しました。トッチャンボーヤだと思うのは今も変わ

りませんしそのボーヤ振りは増々イタについてきましたが、思えばかつての文字通りみっともない総理辞任に至った折りのボーヤにとって深刻な挫折感を体験したことが、彼を鍛え強くしたのでしょうか。数旬を閲し今又、時代はボーヤを呼びもどしたのです。

今年になって日本を取り巻く各国のトップがほぼ全員交替しました。オバマは留任しましたが、これは目下アメリカは国内が分裂中であり、この国内をなんとかまとめるためのボス達の苦肉の策だったのでしょうか。

アメリカの衰退は今や如何ともしがたく、ドルの世界支配がいつまで続くか、世界は固唾をのんで見ています。かたやヨーロッパの没落は云われて久しく、現在EUの混迷はその收拾の手立てを見失っているかのようです。こうして世界の潮流は今やアジアに向かって音を立てて流れています。今まさに世界は

変わろうとしている。この時にボーヤはアベノミクスを引っ提げて登場したのです。

さて六月の七、八両日米中のトップ即ち、オバマと習近平が約八時間にわたり米カリフォルニア州パームスプリング近郊の保養施設サニランズでアジア太平洋地域の新秩序をめぐる「広く深い議論」を重ね、信頼関係構築を図った。と新聞等で報道されています。報道は中々刺激的です。習近平が開口一番、太平洋を中米二国で分けどりしようとのたまわった。その意気はよしであります。

亡き貞子を通して親しくなった矢吹晋先生から三年前「凶説」中国力―その強さと脆さ―の著書をおくられたが、そのはしがきに、―チャイメリカ (Chimerica) すなわち「衰えたアメリカを支える元気のいいチャイナ」という構図は誰の目にも印象づけられ、G20の金融サミット等における中国の一挙手一投

足に、世界の耳目が釘付けされた。―とあるのを見て、全くうまいことを云うなと思ったのです。つまり彼の造語だと思えますが―チャイメリカとはよくも云ったもんだと感心したのです。元来、アメリカと支那は似た者同士仲が良かった。盧溝橋事件（1937年）に始まる日支事変はその実体はアメリカとの戦いだったことは知る者は知っています。当時の支那の空軍はその飛行機もパイロットもアメリカが供給していたのです。当時からしつかりと「チャイメリカ」だったのです。今やその主客が転倒しつつあるのです。

さてわがトツチャンボーヤはただ腕を拱いているわけではない。日本を取り戻すと彼は云っています。どうして取り戻せるのかお手前拝見とみなは観ています。ボーヤが何か云うのを待ってましたとばかり、今や、アメリカも勿論、中国も韓国も声を揃えてボーヤを

中傷攻撃しています。しかしながらボーヤは決して負けません。彼には日本を真に独立させる崇高な使命の自覚があります。

今や日米同盟の実体がだんだん明らかになつてきました。数々のこれにまつわる諸条約なかんずくいわゆるマツカーサー憲法ともどもこれらは、アメリカの日本永久占領政策の一環にすぎません。

さて驕れる者は久しからずアメリカ帝国も先が見えてきました。永久占領は夢まぼろしであります。ボーヤの使命は重大にして成し遂げるには余程の力輔と国民の支持がなければなりません。ありがたいことに我が国民はおろかではありません。

さて、セイ談3号をボーヤの件を確認のためなつかしく頁をくりましたが、ついでに皆さんの文章も読みました。そして亡き貞子の「人生無駄なことなし」をあらためて読み直

しました。この短文は中身が濃く、彼女の人生のエッセンスが凝縮しています。マサに彼女オンリーの人生です。「思えば私の人生は彼女の添えものにすぎなかった」としみじみ思いました。何事も一意専心、真剣に毎日を生きていたのだと、今更私にはすぎたスゴイカミサンだったと思ひ私のアホさを痛感するのです。

先月四日に貞子の三回忌を三男大圓の読経とともに執り行いました。当日は約束通り、笑福亭鶴瓶師匠が奥さん、弟子一人、マネージャー帯同四名で拙宅に見えられ、お弟子の前座つきで本人は「錦木検校」の一席を供養されました。ありがたいことです。しみじみこの世はご縁のものだと思ふ次第です。(了)

(六月十一日記) (炉ばたセイ談庵主)



笑福亭鶴瓶師匠を囲んでの貞子さん三回忌法要親族記念写真



鶴瓶さんの追悼落語「錦木検校」

隣国との関係



十五代 沈 壽官

最近の日韓、日中のギクシヤクした関係に心を痛めている人々が多い。心を痛めている人は日本人だけではない。韓国や中国にも数多く存在する。僕は北東アジアを考えると昔は時間の針を大きく戻す。古代、海人族と呼ばれる人々が日本にやって来た頃いだ。

渡来の海人族は先住民と争い、やがて調和しながらそれぞれの国に収斂され、そして今の『日本』へとまとまっていた。渡来の民は移住に伴い、多くの技術をもたらした。稲作、青銅器、製鉄、文字、仏教、等々、彼等が日本文化の骨格形成に果たした役割は計り知れない。

渡来人とは初期的には朝鮮半島南東部に位置した金海伽耶国の人々であり、後に大量の百濟人、やがて新羅、高句麗、更には揚子江以南の江南の民であった。

半島や大陸で戦いが起こるたびに押し出される様に人々は日本に渡って来た。つまり、日本にいる我々は大陸や半島から、遙か昔、理由あって日本に向けて旅立った、あるいは逃避した人々の子孫であり、現在半島にいる人々は、我々の先祖を追い出したか、見送った人々の子孫と言える。つまり、同じ出自を持つもの同士である。

我が家の初代、沈当吉達も秀吉の朝鮮出兵の際の戦争捕虜であったが、薩摩に釉薬の掛かった高火度焼成による陶器製造技術を伝えた。この時期に、樟脳製造、養蜂、木綿栽培、土木測量、医学、刺繍、製瓦等の技術も半島より伝来している。

朝鮮出兵時、帰国の際、西国大名が連行した朝鮮人捕虜は凡そ五万人と呼ばれる。職能人であった彼等がその後の江戸時代の文化を如何に下支えたのかについては説明する必要もあるまい。

天皇陛下も、日韓ワールドカップ共催の折りに『桓武天皇の生母が百済の武寧王の子孫であると続日本紀に記されていることに、韓国とのゆかりを感じています。』と述べられシヨックを与えたが、つまりそれほど古い時代から交流の歴史があるという事だ。

中国と言う母なる大地から乳房の様に張り出した朝鮮半島、そこに添い寝をする赤ん坊のような日本の姿を俯瞰すると、多くの知識や経験、人材が中国から朝鮮半島を経て日本に流れ込んだ事が頷ける。

しかしいくら元が同じでも異なるものもある。それは自然環境である。環境の違いは日々の営みの違いを、やがて風土の違いを生み、そこに暮らす国民のメンタリティの違いに至る。

さて、大昔、プラトンという哲学者がこう言ったそうだ。

『国民とは怪力を持った船主である。しかし、良く目が見えず耳も遠い。そして政治家とはその船の舵に取りついている水夫である。水夫達は怪力の船主の視力と聴力の弱さに乗じて、耳触りの良い言葉で船主を寝かし付けてしまおうと考えている。怪力の船主が寝てしまえば、この船を自分たちの好きな場所へ運べるからだ』と。

国家と国民の関係を看破した視点だ。

仮に、異なる船が並んでいるとする。舵に
取り付いた片方の水夫が短慮な見識を叫んだ
としよう。それをメデイアという情報商が、
即時に調理しそして販売するのである。それ
により、水夫の不見識は増幅、拡大される。
このメデイアの存在が大昔は無かった現代社
会の特徴だ。

その結果、相手の水夫のみならず、耳が遠
く、目の悪い相手の船主をも苛立たせる。呼
応するように相手の水夫も吠え、相手のマス
コミも即座にその声を調理販売する。

そこには船主同士の会話は存在していな
い。あるのは相互の水夫の罵声とマスコミに
よる情報の拡大販売だ。

作家、司馬遼太郎氏が以前私にこんな手紙
をくれた。

『民族とは些末な物です。文化の共有個体

に過ぎず種族ではありません。互いに面差し
が違うのは環境、風土によります。昔の人が
水が違うだけだ、と言ったのは見事なもので
す。

中略

今の日本人に必要なのはトランス・ネーシ
ョンと言う事です。変圧器の中を電流が流れ
たり、シャーマンの心に神が行き来するよう
に。強く日本人でありながら中国、韓国的心
が分かると言う事です。

中略

小生も年少の頃からそう心掛け、自らを一
個人類に仕上げた積もりです。そして恐ら
く愛国者（無論、日本への）です。真の愛国
はトランス・ネーションの中に生まれます。』
と。

現在の日韓、日中を思うとき、その近さゆ

る。

天皇陛下はゆかり発言の後半部でこう述べられている。『それぞれの国が歩んできた道を正確に知り、個人個人として、互いの立場を理解していく事が大切です』と。

この言葉に勝る隣国関係はないと確信す

大切な事は互いの違いと近さを知り、許し合う姿勢で接する態度であらう。

え不幸な出来事が数多く存在した事は間違いない。しかし、それはある意味、宿命的な事であらう。ただ、私達日韓中の船主（国民）は、互いの水夫の不見識とマスコミのアクションに翻弄されすぎてはいないだろうか。メディアに頼るあまり自らの目や耳で確認せず、判断すら委ねてしまい、却って相互に負のスパイラルに陥っているようだ。



沈壽官窯・工房



白薩摩茶碗 伝火計手
 伝 初代 沈当吉
 十七世紀初頭 沈家伝世品収蔵庫 蔵

薩摩焼は豊臣秀吉による朝鮮出兵に参加した島津義弘が帰国の際に、当時の陶磁器生産の先進地であった朝鮮半島から連れ帰った陶工によって創始された。当初は御庭焼として、義弘のもとで主に茶道具が焼かれたが、中でも、陶工たちが持参した朝鮮の土と朝鮮伝来の技術により、火ばかりが薩摩のものでつくられた薩摩焼を「火計手」と呼ぶ。火計手と伝承のある薩摩焼は、白土に透明釉の掛かった白薩摩茶碗を中心に十数種が知られているが、後世の作とみられるものも多い。沈壽官窯に伝来するこの茶碗は、還元焼成により表面はかすかに青みを帯び、ゆつたりとした丸みを帯びた大振りの姿に、低く径の大きな高台で支えられた荘重な古格の漂う作品である。

トルコの旅



江藤 ヤエ子

五月下旬から九日間のツアーに参加した。甥の嫁・智恵子さんを誘う。私は二十九年ぶりのトルコだが、彼女は初めてなので喜んでいった。福岡空港から大韓航空機でソウル・仁川経由でイスタンブールに行く。十九時四十分着。空港近くのホテルに泊まる。

第二日目 ツアーの一行は二十三名。ご夫婦三組。男性一名。他は女性だった。添乗員は女性の村上さん。現地ガイドはアイハン氏でアイちゃんと呼ぶことになった。私はアイちゃんが女性なら、「いじわるお米に手を引かれ、愛ちゃんは、太郎の嫁になる」の流行歌

があつたことを思い出し、歌ったが、智恵子さんには通じなかった。古い歌で歌手ももういないからである。

バスでゲルボル港に行き、フェリーでダーダネルス海峡を渡りラブセキ港に着く。トロイ到着。伝統に基づいて復元された木馬を見た。巨大木馬である。兵士が中に隠れていたのだから、重かっただろうに、トロイ軍は、陣内に引き入れたので、負けたのである。知恵比べの戦いだったのだ。

エーゲ海近くのアイワルクに泊まる。売店でスカーフを求めた。結び方を五通り教えられたが、二通りしか覚えていない。

第三日目 小アジア最大の古代都市遺跡群エフェソスに行く。野外劇場ではコーラスで「夏の思い出」を歌った。全員の記念写真も写した。世界の七不思議の一つと言われているアルミテス神殿跡も見た。ギリシャ神話の



エフェソス遺跡（古代都市遺跡群）にて



エフェソス遺跡・アルミテス（ギリシャ神話の狩猟の女神）・
コウノトリの子育て

狩猟の女神が祀られている。一本の高い柱が残っていて、コウノトリが子育てをしていた。

昼食後、革製品専門店に寄る。先ずは、ファッションショーがあつた。若い頃は、スクーターに乗っていたので、革のコートも着ていたが、指宿に住み、車の生活だから必要を感じないし、素敵な商品は一桁高くて手が出なかつた。

夕方、バムツカレに行く。トルコ有数の温泉地で、段々に連なる真っ白な石灰棚に溜まった温泉水の池が刻々と変化する空の色を映し、美しい奇観を楽しむことができた。私たちは靴を脱いで、足湯に浸かつた。靴を入れる袋を貰い、裸足で歩いた。監視員がいて、勝手に入ろうとした外人女性を大声で注意していた。

第四日目 八時発で、京都と姉妹都市のコンヤに向かう。途中の休憩所では、蜂蜜ヨー

グルトがあり、店員がコップを逆さにしても流れ落ちなかつた。

トイレ休憩所はキヤラバンサライ(隊商宿)があつた。夕方、カップパドキアに着いた。

第五日目 朝三時半起床。気球ツアーに行く。代金二万円である。九名の参加だつた。他の方は、高所恐怖症とのこと。私はこのOPが楽しみだつたのだ。

集合場所で、軽い食事をした。バルーンにガスバーナーで空気を送る。係員の数名はバルーンの項上を持っていて、段々上になると、ロープを持っていた。寝ていたバルーンが実直ぐに立ち上がると、大きな籠の中は四つに分かれていて、一つに五名ずつ乗り込む。梯子が無いので、靴を入れる小さな穴が二カ所開けてあり、そこに靴を入れて、やつとのことです中に入った。上がる時と下りる時には籠の中に足を曲げて低い姿勢になるのだつた。



気球ツアー

私は智恵子さんの膝に乗せて貰い楽だった。

太古の昔、火山の噴火によって堆積した溶岩や火山灰が、長い年月の間に侵食されてきた奇岩群を上から眺め満足した。自分の乗ったバルーンは写せないなので、傍を飛ぶバルーンを写した。

三十分くらいで下りると、テーブルが用意されていて乾杯をした。ノンアルコールは葡萄ジュース、酒飲みの方には、そのグラスにシャンペンを入れて配られた。バルーンに乗った証明書も貰った。ホテルに戻っても、朝食があった。

九時からギョレメ野外博物館に行く。古代ローマ時代にキリスト教徒が岩を掘って住み始め、約三十の洞窟教会が集まり、複合遺産として世界遺産に指定されている。

次に、トルコ絨毯店に行く。若い男性店員が、次々に絨毯を広げて見せる。少し買いたいそ

うな振りをした人には、執拗に声をかけてきて、「恐くなった」と、逃げてきた女性もいた。前に来た時には、家を新築したばかりだったので、玄関用の小さい絨毯を購入したが、もう先の短い暮らしでは何も必要とは感じなくなってきた。

カイマルク地下都市に行く。まるで蟻の巢のように地下へと延びる巨大地下都市である。地下八階の深さで、五千人以上の人が生活できたと推定されている。中腰になって歩かないと、頭を上壁に打つ狭さだった。私も数回頭を打ったが、帽子を被っていたので痛くはなかった。

昼食後、四WDサファリをした。四名ずつ載って、鳩の谷、愛の谷、ラクダ岩、三人娘の岩などを見て回った。六台に分乗したが、私たちの運転者はハンサムで、助手席に乗って智恵子さんは、「運転手が面白い仕草をして

歌を歌い、楽しかった」と、笑顔だったが、後部席の私は、何も聞こえず、見えずで、ただ砂ほこりを被り揺れる車から落ちないように足を踏ん張っていたのだった。

宿舎は、壁も天井も岩を掘って造られていて、浴室には丸い浴槽があり、その奥にはシャワー室もあった。昔泊まった部屋は床に絨毯を敷いてあり、狭い所だった思い出があり、昔の俳のない場所が変わっていた。

第六日目 先ず、トルコ石専門店に行く。前に来た時にはブローチを求めたが、今回は目の保養をしただけだった。

それからアンカラに向かい、アタチュルク廟やアナトリアン文明博物館にも行った。室内は撮影禁止が多く、建物の外だけ、カメラで写しても、帰国すれば、何処が何処やらになつてしまう。

アンカラ空港からイスタンブールへ飛行機

で移動した。昔はバスで八時間かけての移動だったから体が楽になり助かる。旧市街にあるホテルに泊まる。

第七日目 ブルー・モスクに行く。礼拝の時間を知らせるための尖塔ミナレットが、世界で唯一、六木立つのが特徴。メッカ以外は通常四本でしか立てられないのだが、アフメット一世が、「黄金(アルトゥン)の」と、命じたのを、「六本(アルトゥン)」と聞き間違えたためにできたという逸話が残っている。頭にスカーフを被り中に入る。それから地下宮殿に行く。六世紀に造られた地下貯水施設。水の中には鯉が泳いでいた。

その後、グランド・バザールに移動。十五世紀より建設が始まった巨大バザールだ。迷路のような路地に五千の店がひしめき、金銀細工、宝石、絨毯、ガラスや革製品、陶磁器など伝統工芸品やお土産品を売っている。智

恵子さんは、ランプを求めていた。私は何も買わず、目の保養で歩いた。

休憩後、二十時からペリー・ダンスショーを見に行く。夕食を食べている時、ダンサーが来て、一緒に写真を撮写していたが、私たちが女性の所は素通りした。前に見た時には、ダンサーがテーブルの上を客の前まで来て踊り、客はお札を胸や腰に入れていた。日本人は誰も入れなかったので、ダンサーは怒り、二度と私たちのテーブルには来なかった。今回は舞台の上で踊り、客を引張りだしていた。

第八日目 今朝はゆっくりで十二時集合。ボスポラス海峡クルーズに行く。乗船してから昼食。鯖のサンドを食べた。アジアとヨーロッパを分ける南北三十一キロメートルの海峡で景色を眺めながら楽しんだ。別荘やベイレルベイ宮殿、乙女の塔などがあった。

下船後、エジプシヤン・バザールに行く。

し字型の市場で、日本人女性が嫁いでいる店もあつた。エジプトからの交易品、さまざまなスパイスや珍しい薬用品が並ぶ。インドを思い出す匂いがしていた。

夕方、トプカプ宮殿に入る。広大な敷地内は四つの庭園エリアに分かれ、それを囲む建物は、博物館になっていた。

夕食は日本食の予定だったが、トルコもデモをしていて、その店には行けず、中華料理に変更され、「鳳凰閣」で食べた。七品出た。案外あっさりした味だった。

十九時過ぎ、イスタンブール空港に着く。二十一時二十分発の機で韓国に向かう。

第九日目 十三時四十分、仁川空港着。乗り継ぎ五時間待ちである。体験コーナーがあつたので、「お面」作りをした。型を貫い、モデルを見ながら、色粘土を伸ばして貼り付ける。白と赤の粘土だが。型が黒なのでクロン

ボの面が出来た。智恵子さんは、「来年の節分の豆撒きに被ろうかしら」と言っていた。角は無いが、面白いと思つた。

仁川空港は設備が良く、二階には休憩室が沢山あり、足を伸ばして休むことが出来て助かった。肩くらいまでの衝立があり、空いている場所を探して休む。

十八時三十五分発の機で、福岡着十九時五十五分。智恵子さんは、直ぐに熊本行きのバスがいたので別れる。

私の乗るバスは二十三時五十五分発で、九州中でも最終バスだった。(エッセイスト)



母の三回忌によせて

山本 洋子



早いもので、母が亡くなってから二年が過ぎた。この二年間で変わったことといえは、長野から東京に戻ったことだ。

母が救急車で運ばれたと父から連絡を受けたのは、日曜日の昼前で、ちょうど、お昼のやきそばを子供たちに取り分けている最中だった。「これから手術で、携帯が使えなくなる。連絡の取れない兄弟達に洋子から連絡しといてくれ」。

急なことで、父もこの時は、極力冷静に普通に話していた様に思う。私は思わず「えっ」と絶句した。よりよって頭を……。自称『コンピュータおばあちゃん』と言っていた

母の頭脳を神様は破壊したのか。

他の兄弟は知らないが、私は父から「八割、脳が死んでいる」と聞いて、もうダメだと思つた。さらに長野と鹿児島というどうしようもできない距離に腹が立ち、電話をきると、なるべく子供たちに気づかれぬように、泣きながらやきそばを食べた。

母は、生前、入来を全国区にしたいという野望を抱いていた。私が何か電話で相談する度に、「待ってなさい。そのうちママが有名になって、入来も有名になるから」と自信たっぷりに話していた。電話口で、何を根拠にそんなことを言っているのだろうと聞き流していたが、母の葬儀で、政界からのそうそうたる弔電の数や参列者を目の当たりにして、本気で入来を売り込もうとしていたのだと再認識したのだった。

そんな夢なかばで逝ってしまった母の願い

を、意外な人物が叶えてくれることになる。もしも、すべてとは言わないまでも、この世で起きる現象はイメージから造られているのだとしたら、母が亡くなってから、嘘ではなく私は漠然と、「鶴瓶さんの番組が入来に来ればいいのに」と常々思っていた。入来を全国に知らしめるには、有名人のテレビ番組に出るのが一番手っ取り早いと思っていたのだ。歳月は流れ、無事に一周忌が過ぎたある秋の夕暮れ、なんと本当に鶴瓶さんが番組で入来に現れた。NHKの『家族に乾杯』という全国区の旅番組である。

父からその話を電話で聞いて、驚いたのは言うまでもない。まして番組とはいえ、父と鶴瓶さんが酒を酌み交わして仲良くなり、なんと母の三回忌には追悼落語をしに来てくれるという。

オンエアーで画面いっぱいに映し出された

母の写真をテレビで観たとき、「母は死んでない」と思った。生前の希望通り、全国に入来の地名と共に自分の顔と名前が知れたのだから。

それから五月の三回忌が無事に終えるまでの間、一番準備に奔走してくれたのは姉だった。私も長野からの引越しがなければ鹿児島まで手伝いに行きたいところだったのだが、何しろ引越した代に加えてアパートの礼金、敷金に子供の幼稚園の入学金と制服代などでそれまで貯めてきたパート代はすべて泡のごとく消えてしまった。

五人も兄弟がいる中で、結局はみな姉におんぶに抱っこという、まあ、予想通りの展開になった。なにしろ、プライベートで鶴瓶さんが来てくれるのだ。しかも奥様まで連れて。しつかりと準備をして出迎えなければ失礼になる。一週間も前から嫁ぎ先の四国から鹿児島

島入りをして、大掃除やら決めた段取りをこなしていく姉。しかし、イベントにハプニングはつきものである。姉は、三回忌を控えた前日に、右足をひねって救急外来する騒ぎとなってしまった。

私たち家族は、格安航空チケットが夜の遅い便しか手配出来ず、飛行場から最終の高速バスで入来へと向かった。いざ、実家へ着くと、父は普段ならもうとっくに就寝している時間帯なのであるが、次男家族と酒盛りの真っ最中で、すでに出来上がっていた。酔っ払いの父に「洋子が来るのを待っていた」と、ここでまたさらに乾杯。聞けば、もう三時間以上も飲んでいるとのこと。なかなか集まらない子供や孫が、三回忌を前に顔を並べたのがよほど嬉しかったに違いない。しかし、ここでの飲みすぎが原因で、その後、父はトイレに向かう途中、大コケしてしまい、なんと

下唇を。パツクリ切って流血するという、姉に続く怪我騒ぎとなるのだった。

三回忌当日、右足負傷で思うように動けないでいる姉の指揮のもと、その穴を埋めるべく、親族一同てきぱきと指示に従って動いた。

父はというと、よほど強く打ったのか、パツクリ切った下唇が想像以上に腫れてしまい、まるで松本清張のような人相に様変わりしていた。

三男による法事をつつがなく終え、食事の接待が済むと、姉の号令で一氣に片付けが始まり、鶴瓶さんを迎え入れる準備にとりかかると、お酒が入り、まだ喋り足りないでいるほろ酔い気味の客に対しても「時間です」と容赦なくお膳を下げる姉。しかし、その客人もまた、鶴瓶さんの落語を楽しみにされて来ているのだから、いたしかたない。すべては、『鶴瓶さんの追悼生落語』という前代未聞の

できごとを成功させるためなのだ。

時間通りに鶴瓶さんは、妻とマネージャー、弟子一人を携えてやってきた。玄関に入るなり、我が家の広間に三十人はいたであろう母を偲ぶ方たちのどよめきと拍手が沸き起こった。

鶴瓶さんはまず母の遺影にお線香を上げると、私たち親族と軽く挨拶を済ませ、今日の落語の段取りを父と確認した。なんと、今回の鶴瓶さんだけでなく、弟子の前座も取り入れてくれるとのこと。弟子が落語をしている間に着物に着替え、父との軽い漫談後、追悼落語をしてくださると言う。

実際、口は清張、舌は毒舌な父との漫談はコンビかと思うくらい息もぴったりで面白かったし、この日のために鶴瓶さんは移動中にもマネージャーを相手に練習してくれた「錦木」というホロリと泣ける新作落語を披露し

てくださり、律儀で誠実な人柄が語りにも表現されて、本当に夢のようなひとときを過ごした。

思いもよらぬサプライズの連続で終えた母の三回忌は、賑やか好きで、町の人が喜ぶイベントを数多く企画し成功させてきた、いかにも母らしい法要であった。

そして何より、生前こんなに一度に顔を会わせた機会もなく、いつもは父独りで暮らしている広い屋敷に、兄弟含め親族一同が集まったことを、天国の母はとても喜んだに違いない。芸能人という枠を超えて、人として父との約束を果たしてくれた鶴瓶さんに心から感謝したいと思う。





漫談中のお二人



鶴瓶ご夫妻と入来院家子女

モクズガニ、その驚きの生活史

下土橋 渡



九月も下旬になれば、著者の住む鹿児島県さつま町では町内を流れる川内川で、秋の風物詩「落鮎のやな漁」が始まります。落鮎のほかにもクズガニや川エビが獲れて町の特産物になっています。山奥の溪流までのぼって生活することから別名を「山太郎ガニ」の名で親しまれているモクズガニは、甲幅が七八センチ、体重が百八十グラムほどになり、川で獲れるカニとしては大型で、鋏脚に濃い毛が生えているのが大きな特徴です。

「山太郎ガニ」は、野菜や豆腐などと一緒には味噌汁や鍋にして食べると、カニの旨みが

ダシににじみ出て、コクのある味わいが楽しめるため、昔はそれぞれの家で川に獲りに行って食卓に上がったものでした。最近では、専門の漁師さんの獲ったものが物産館などで売られています。

この慣れ親しんだ、一見平凡に見えるモクズガニが雄雌とも秋から冬にかけて交尾・産卵のため海まで下るといふ、その驚くべき生活史をご存知でしょうか。まず、決定的な三つの事実。

(一) 川に生息するモクズガニだが、幼生は塩分濃度の高い海でないと成長できない。
 (二) 淡水域で繁殖を行い幼生が海域へ流れ下るアユや川エビなどと異なり、モクズガニは親がちやんと海域まで移動して海域で繁殖を行う。

(三) 淡水域で繁殖を行って生活史を全う

するモクズガニの個体群が報告されたことはない。逆に、淡水域に遡上せず、海域で生活史を全うする個体群が報告されたこともない。

すなわち、カニは祖先が海で生まれたなごりで、川や陸で生活しているものも、サワガニ類以外は幼生期を海で過ごすのです。そして、モクズガニもその例外ではないというわけです。つまり、モクズガニは、塩分濃度の高い海と淡水域である河川（それもかなりの上流域）の間を確実に回遊するのです。

モクズガニが捕獲されるさつま町から川内川河口までは、四〇キロ近い距離があります。また、長野県の諏訪湖でモクズガニが捕獲されたという記録があるようですが、諏訪湖から新潟県の日本海岸までは百キロ以上の距離があります。あの小さな体のカニがこれほど長い距離を川の流れに逆らってどうや

って遡上するのでしょうか。そして、海まで下った雄の交尾習性はユーモラスであり、一面哀れでもあり、また微笑ましくもあります。

秋になると成体は雌雄とも川を下り海に出ます。雄は海岸を放浪する習性が強く、交尾相手の雌を探して数キロ以上移動します。しかし、繁殖可能な雌を識別する手段を持たず、視覚でのみで相手を探すしかないため、場合によっては未成体の雌や、あるいは雄や他種に接近して抱きつくことさえあるそうです。

卵から孵化したばかりのカニの幼生はゾエアと呼ばれます。受精卵からゾエア幼生になるまでのプレゾエア幼生の期間を雌の腹部に抱かれた卵（卵膜）のなかで過ごし、雌の腹部から海に放されるときに、孵化してゾエア幼生になります。雄が海岸を放浪しながら

首尾よく交尾相手を射止めると、数十分程の交尾が続く。交尾が終わると、雄は雌を抱きかかえ他の雄に奪われないよう「交尾後ガード」を行なうのだそうです。

孵化したゾエア幼生は〇・四ミリたらずで、親とは全く違った形をしています。ゾエアは四回脱皮してメガロパになり、メガロパは一回脱皮して稚ガニ（成体と同じ形をしている）へ変態しますが、メガロパになるまでの期間、ゾエアは遊泳能力の乏しいプランクトン生活を送るため、多くが魚などに捕食され、生き残るのはごくわずかということになります。一方でこの時期の幼生は、浮力を調節したり、垂直方向に移動したりすることで潮流に乗り、広く海域を分散すると考えられています。

メガロパに変態した幼生はエビに似た形となり、腹肢による積極的な遊泳を行なうこ

とができるようになります。遊泳能力の増したメガロパ幼生は、大潮の夜、満潮の潮に乗り、一気に海域から河川の感潮域へ遡上します。メガロパ幼生には、淡水への順応性と流れに對する正の走性（流れに逆らうように泳ぐ走性）が備わるため、瀬や魚道の直下に集中して着底することができるようになります。

稚ガニに変態後しばらくして甲幅が五ミリ程度になると上流の淡水域へ遡上分散を開始し、甲幅が一〇ミリ台になると成長しながらかなり上流まで分布域を拡げます。このサイズの未成体は歩脚の長さも比較的長く、移動するのに適した形態を持つようになり、垂直な壁もよじ登ることができるようになります。稚ガニへ変態後一年で甲幅一〇ミリ台、二年で二〇ミリ台に達し、多くは変態から二〜三年経過したのち夏から秋に成体になります。

成体はおもにその年の秋から冬にかけて川を下り、河口域から海域で九月から翌年六月にかけて、ほぼ十ヶ月間繁殖に参加します。雌は四く五ヶ月の間に三回の産卵を行い、回を経るごとに産卵数は減少します。繁殖期の終わりになると雌雄とも疲弊してすべて死滅し、死骸は河口付近の海域に打ち上げられ、ウミネコなどのよい餌になります。

一度川を下って繁殖に参加した成体は、繁殖期の終わりに死亡し、二度と川に戻ることはありません。多くは、産卵から数えて三年から五年程度の寿命と考えられています。

河口あたりで生活しないで、なぜ成長するためにわざわざ遠い山奥の上流まで遡上してくるのでしょうか、不思議です。モクズガニは祖先が海域から河川へと分布を拡げ、淡水環境での成長という形質を獲得したものの、歴史が浅いためサワガニ類のような完全な淡

水環境での繁殖能力が獲得できていない、「いまだ進化の途上にある種」とみなされることが多かったようですが、実際はどうも、「河川淡水域での成長」と「海域での繁殖」による分布域拡大という、両方向の環境への適応を活用している種だということのようです。生命の力、生命の神秘さというものを感ぜずにはいられません。

(元九州職業能力開発大学校教授)

参考文献

- (一) カニの発生(カニの自然誌ホームページ)
- (二) モクズガニ(フリー百科事典ウィキペディア)
- (三) モクズガニの成長と回遊(徳島大学総合科学部地域生物応用学研究室ホームページ)
- (四) 南の動物プランクトン カニ・エビ類の子供たち(国立科学博物館の研究活動ホームページ)



モクズガニ (山太郎ガニ) ～ウィキペディアより



川内川の落鮎の築 (やな) 作り。2012年9月28日、さつま町の須杭で撮影。落鮎にまじって、モクズガニ (山太郎ガニ) も捕獲されます。

宮沢賢治と法華経



宮下 亮善

文学者としての宮沢賢治論は、多くの作家や研究者たちにより紹介されていますが、「法華経の行者」としての評価はあまり語られていないようである。敢えて批判を覚悟して言わせていただければ、賢治は「法華経の行者」として「常不軽菩薩」のように生きたいと願った三十七年間の生涯ではなかったかと、私には思われてならない。

それは、父・政次郎に『国訳法華経一千巻』を知己にあげてくださいと遺言し、その経の後ろに「私の生涯の仕事は、この経をあなたの元に届け、仏意に触れて、あなたが無上道に入られますことを」と書いてくださいと頼

むことからして、尋常ならざる法華経への傾倒が読み取られるからである。

その「常不軽菩薩」とはどのような菩薩なのかということを説かねばなりません。法華経の『常不軽菩薩品第二十』に説かれている菩薩です。

会う人ごとに礼拝して、「私はあなたがたを心から敬います。けっして軽蔑しません。それはなぜかと申せば、あなたがたは菩薩の修行をして、未来に仏になるかたがたであるからです。」といって、拝み廻って歩く菩薩のことです。

廻りの人々は、この菩薩の真意を理解せずにかえって怒り、石を投げつけたり、罵詈雑言を浴びせかけて非難するわけでありますが、この菩薩はまったく意に介することもなく「私はあなたがたを心から敬います。けっして軽蔑しません。」と、同じことを繰り返し

繰り返し何年も歩き廻っていました。

— そうこうするうちに「あなたがたを常に軽んじません」といったところから「常不軽」というあだ名をつけられて呼ばれるようになった菩薩である。

—— ヒデリノトキハナミダヲナガシ

サムサノナツハオロオロアルキ

ミンナニデクノボートヨバレ

ホメラレモセズ

クニモサレズ

サウイフモノニ

ワタシハナリタイ——

この心境は常不軽菩薩の心に通じるものがある。

比叡山の「千日回峰行」も、この常不軽菩薩の「礼拝行」の実践行ともいわれており、山中の神や仏や草も木にも、それこそ拝み倒して行く修行である。



宮沢賢治 (1896~1933年)

『法華経』とは、所謂、大乘仏教の王経ともいわれ、利他救済の立場から広く一切衆生の平等と成仏の菩薩乗を説き、それが仏の教えの真の大道であるとする教えである。大乘とは、「大きな乗り物」の意で、全ての衆生が手に手を取り合って彼岸へ渡ろうという意であり、菩薩乗とは、『上求菩提下化衆生』つまり、上に悟りをもとめ、下に衆生を済度するという位の意である。その法華経如来寿量品に『不自惜身命』とあるが、自らの身命を惜

しまずに他のために利するものこそ、法華經の行者であり、実践者であるといふのである。法華經とは、行動の哲学であるといえる。

東ニ病氣ノコドモアレバ

行ツテ看病シテヤリ

西ニツカレタ母アラバ

行ツテソノ稲ノ束ヲ負ヒ

南ニ死ニサウナ人アレバ

行ツテコワガラナクテモイトイヒ

北ニケンクワヤソシヨウガアレバ

ツマラナイカラヤメロトイヒ

行ツテ、行ツテ、行ツテ、行ツテ 賢治は自らの人生の行動指針を法華經に求めたものと考えられる。

『農民芸術概論綱要』に、世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はありえない、自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する。この方向は古い聖者の踏み

た教えではないか、新たな時代は世界が一つの意識になり生物となる方向にある。正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである。われらは世界のままことの幸福を索ねよう、求道すでに道である。自我の意識が宇宙意識まで進化するのは、古い聖者の教えたもうた道、すなわち釈迦の教えということであり、法界成仏のことである。まさに、仏とは宇宙の真理を会得した人々のことで、銀河まで開かれた自我意識はおのずから世界全体の幸福を考えるようになる。そのことが自我の必然的進化である。と述べている。『種山ヶ原』に、雲が風と水と虚空と光と核の塵とで成り立つとき、風も、水も、地殻も、また、わたくしも、それとひとしく組成され、じつに、わたくしは水や風やそれらの核の一部分で、それを、わたくしが感ずることは、水や光や風ぜんたいが、わ



日輪と山（賢治画）

たくしなのだ。―自然をはじめすべてのものを自分自身と見ている。あらゆるものが宇宙の法則の中にあり、法則に従っており、あらゆるものが、人も、自然も平等だ―

これらの二編からも、大乘仏教的思惟《法華経的》をみることができるといえる。

そもそも、賢治と法華経との出会いは、大正三年十八歳の時、父・政次郎から『漢和対照 妙法蓮華経』を贈られたのが機縁となったもので、生涯の信仰となった。

宮沢家は代々の浄土真宗の熱心な門徒であり、父・政次郎は聞法会などを開き、浄土真宗に限らず他の宗派や宗教、哲学、古典など広く学んでいた。このような、家庭環境の中で育ち後々の賢治に影響を与えない筈がありません。しかし、熱心な浄土真宗の家庭に育ちながら、なぜ、法華経に傾倒し改宗したのでしょうか、父の開く聞法会にも参加し、『教行信証』『歎異抄』など学び親鸞の説く「他力本願」の教えも十分に理解していたと考えられます。また、親鸞自身も九歳で出家し、比叡山に登り「千日回峰行」など厳しい修行にも耐えながら、二十九歳の時、京都六角堂に百日参籠し、救世観音の「夢告」により、比

叡山を後にしたことも知っていた筈である。

あの有名な《善人なほもて往生す、いはんや悪人おや》所謂『悪人正機』親鸞の念仏思想の真髓にも触れていたものと思われます。

宮沢家の稼業は商家ではあったが、質・古着商を営んでいたということが、幼き賢治に影響を与えたものと思われます。当時の東北地方は冷害の影響で、飢饉や凶作のために農家は食うや食わずの中、口減らしのため娘を苦海に沈める惨状であった。このような、貧しい人々の姿をわが家の店先で見聞きする賢治の気持ちはいかばかりであったことでしょうか、そのことが賢治の心の奥底に重くのかかったことは容易に推察されます。

「燃ゆる信仰から精進の一路へ

高農を優等で卒業した宮沢賢治君

聖日蓮生誕七百年の思いで深き日に

剃髪して深夜漂然 家出す」

大正十年三月六日の岩手日報に、掲載された記事である。父・政次郎との信仰上の相違が原因であった。

その信仰上の相違とは、親鸞の説く《易行門―他力念仏「易」を水路の乗船》と法華経の説く《聖道門―自力修行「難」を陸路の歩行》との見解の相違であったと思われます。

親鸞の比叡山との決別の大きな理由は、自ら悟りを求め厳しい修行に明け暮れても、その煩惱妄想を断ち切ることができずに苦行を捨てざるを得なかったことであり、親鸞の苦悩は古くて常に新しい根源的な問題を今もなお投げかけている。《妻帯の決心》「祈ることで悟りを得ることのできない愚かな人間であるとし、自らを愚柔親鸞とさげすみ」唯々、阿弥陀の救いを願う「他力本願」の教義を確立した。

賢治は大正九年二十四歳の時、法華経系の

宗教団体「国柱会」に入会した。「農家は鋤鋤をもつて、商人は算盤をもつて、文学者はペンをもつて、各々、その人に適した道において法華経を身に読み、世に弘むるというのが、末法における法華経の正しい修行の在り方である」と、国柱会理事の高知尾師に教化され、文学創作活動と信仰を結びつける賢治の創作活動が弘まることになる。

「童子こさえる代わりに書いた」

賢治の童話創作への傾倒さが想像される。

法華経は一切の衆生は仏になると説く教えでもあるが、現実の諸々の社会の苦悩の解決にも積極的にかかわり、その救済のためには身命を賭けても尽くせよという教えでもあれば、賢治にとつては、目の前に苦悩する人々を看過できないものがあり、その心境が法華経の教えに共感を覚えたものと理解できる。

それは、病の床にあつても農業指導の相談

者がそれとは知らずに訪れても、病を押しても相談に応じている姿からでも伺える。

悪事は己に向かえ、好事は他に与え、己を忘れて他を利用する。賢治は文学を通じて、法華経の行者として、菩薩者でありたいと生き抜いた人であった。

「ねがわくは 妙法如来 正遍知
大師のみ旨 成らしめたまえ」

妙法如来、正遍知、いずれも悟りの世界です。伝教大師の説く悟りの仏の世界が、この世に満ち溢れているようにと願った詩です。比叡山にこの詩を遺している。

法名―真金院三不日賢善男子

真金とは釈迦の事、三不とは三毒(貪・

瞋・痴)を犯さずの意。

昭和八年九月二十一日没 享年三十七歳

(天台宗大雄山 南泉院住職)

濡れた仔馬のたてがみを



福元 忠一

父の平次は、無類の馬好きでした。明治生まれの小学校卒業で、色々な仕事を渡り歩いた末、一人前の大人になった頃には、鹿児島市内の豪商の米問屋に馬車引として雇われていたようです。

馬車の先頭には、もっとも体格のよい馬の手綱をとり、誇らしげな活躍振りを話してくれたものです。

フオークリフトの無かった昔のこと、棧橋での荷役作業は、肩に担いで米や砂糖・骨粉などを運ぶ仕事で、力自慢の他には取り柄が

なかったからです。

入来で所帯を構え、小商売を始めて、最初に馬を手に入れたのがシマウマでした。縞馬、つまり、ゼブラではなく、トカラ馬です。

トカラ島があることも、トカラ馬がいることも、子供の私には新鮮な発見でした。

当然のごとく、トカラ馬の体型に相応しい大きさの馬車を特注しロボのパン屋さんならぬ、こんにやく屋となり、家族を養ってくれました。

数年経ったのち、少しばかりの蓄えもできたのか、普通の馬を手し、普通の馬車で稼ぎも増えて、人並みな暮らしもできたようでした。

ある日、学校から帰ってくると、既には仔馬が入っています。やっと乳離れしたばかりとでもいえるようなかわいい栗毛の牡馬です。名前を「孝」とつけました。

鼻筋には、かねて父から聞いていた、品の良い馬の代名詞とされる、なんと、(流れ星の三白)です。

(流れ星の三白)とは、鼻筋に、白色の流れ星風の模様があり、そして、足首には三本の白色の足、つまり、(ホワイトソックス)です。

およそ動物の子は、犬であれ、猫であれ、はたまた豚であれ、可愛いに決まっているが、馬の子の可愛いときたら、別物で、鳴きのほか鳴き声など無いは等しいのに、驚きのしぐさなどに至っては説明の仕様はないものです。

すでに、餌をやったり、糞を始末したり、体を水で洗ってやるのも私の手伝いと決められていたころのこととて、楽しくて、学校から帰っても先ずは孝をみるものでした。およそ半年も経てば人間ならば少年の年頃となり、訓練が始まります。

先ず、轡をつけて手綱をつけますが最初は嫌がりませす。

慣れてきたら首を下げて轡をくわえてくれるぐらいに従順になり、愛情を感じたものです。

次には、背中に箆などをくくりつけ、鞍に慣れさせる訓練をします。馬車に慣れさせるにも順を追うて根気のいる作業が続きます。

「馬耳東風」などとありますが、風向きなど関係ない訳ではなく、常に聞き耳を立て、物音に敏感で、当然の本能です。

その一方で、私は遊ぶほうに夢中で、裸馬に乗るには、身長が足りないために、馬小屋の屋根から下に向かって飛び降りる方法をと、驚かせたものです。

その裸馬で、野道を駆けたり、たまには、腕白な友達を乗せて、二人乗りをして遊んだこと、雨の後の濁った川を流れに逆らって孝

を泳がせたり、都会の子供には説明もできない奔放な少年でした。

学校で勉強をするなど、全然なかったように振り返っています。

孝は「濡れた仔馬のたてがみを」と歌の一節が出る幸せを与えてくれました。

鞍は、父が戦後の軍人の払い下げとかを探してきたらしく、貴重品扱いで、数回しか使わせてくれませんでした。

揃いの乗馬靴は私に大きすぎたが、拍車も着いており、もし、拍車をかけると孝にとっては、痛いだろうなどと、想像しました。

初夏のある日、大谷の山に薪の運搬に出かけました。馬車に満載の薪を積み、馬にはいたわりの気持ちで、乗らずに後ろを歩いて、緩やかではあるものの、でこぼこの下り坂が続きました。

谷のせせらぎの水は清く、鶯も深山の向こ

うからも澄み渡って聞こえていました。

この日の午後、事故は起きました。

孝が長さ五メートルほどの木の橋を渡り終え、あと少しのところまで馬車だけが渡り終わろうとする頃に、みしみしと橋が壊れる物音が始まったのです。

続いて、孝も後ろに引き落とされながら谷の水しぶきの中に土煙とともに落ちて行きました。

一瞬の出来事で、橋が腐っていたらしく、人も馬も手の出せる訳がありません。電話も無い時代で、自転車を借りてひとを呼び、孝を引き上げ、馬車で連れて帰る途中も痛そうな様子で、足を激しく動かしたり、涙を流しながら、一時間ほどで帰り着きました。

父の馬車引き仲間の清熊小父は、宮相撲の横綱で、そのうえ、弓取りも得意な、いつも柔和な顔の人で、孝の運搬を引き受けて貰っ

たようでした。

家に着いた頃には、小さな集落なのに聞きつけて、人だかりがしていました。

「んだもしたん」と、呟くおばちゃんたちのざわめきがありました。馬喰がいうには、怪我をした馬には、治療の方法はないことを知りました。

孝もこの先の運命を本能的に分かっているように感じられました。

父は険しい顔をして押し黙ったままで、家族みんなも同じでした。

やがて日も傾き、馬車は動きだし、大宮神社を過ぎるころ、清熊小父は、腰にぶら下げている手ぬぐいを手に握り換え、杉の木立が隠れるあたりで見えぬ顔を使わらしい仕草が感じられました。

私は、裏庭に隠れて声を殺してすすり泣きました。

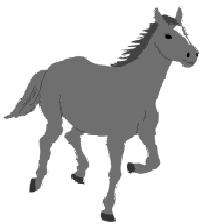
人間の年に教えたら十八歳にはなろうかと
思われる年頃に、我が分身にも似た愛馬が悲
しみの別れをいたしました。「濡れた仔馬のた
てがみを」と、声には出なかったのです。
そして、前後して一家には不幸が続きまし
た。

長兄が十八歳で戦病死、母が四十二歳で逝
き、次兄も十八歳で病死、祖父母と続き、そ
のほかにもまだ続き、暗くて長い我慢の人生
でした。

その後、父には、およそ三十年間、安穩な
時が巡り、七十九歳で生涯を閉じました。

合掌

(元入来町長)



大宮神社

—国歌君が代発祥の地—



福元 忠一

大宮神社には、毎年大晦日から元旦にかけて神楽舞が舞われるが、一番の大祓に始まって、二十六番の神道までであったらしい。入来町誌下巻によると、その中の一つに、十二人剣舞があり、「すめらぎの国の初めを尋ぬるに、銚のしづくや葦原の里」という和歌を朗詠し、つぎに「君が代は千代に八千代にさざれいしのいわほとなりて苔のむすまで」と朗詠される。

ひきつづいて「さつて言語道断言語道断鬼形がおさえしかの地のところに、太刀を結界捧げあることは、これ不審とも不審なり。よ

く開くものならば、許すべし。また悪しく開くものなれば、彼の御標の内に七日七夜の大牢をさせんとや。所の禍神み神楽の障りとなるべし。何の疑いもあるべけん。さつてこれより十二方に立つたる神は、いかなる神の變化にてましますか。疾う疾う開け、我は聞かん。」

この時十二人は立つて鬼神の前へ出て、「君が代は千代に八千代にさざれ石のいわほとなりて苔のむすまで」と歌い次の祭文を唱えて十二方に正座する。

再拝再拝敬つて申す。抑抑中央はさもけしからん御姿となりて、四方四面をとがめ給うは何の仔細に候や。抑抑この御神針と申すは、天照大神の岩戸に閉じ籠らせ給うに依りて、常闇の夜となり、八百万神達岩戸の前に神集いまして神楽を奏し百舞給えば常闇の雲晴れども諸神達は手を上げて、あな面白やと力強

くも舞給う。

今にその式を唱えて此所に御神屋を作り、注連縄引き渡し、十二方に剣を結界、地を定め彼所を鎮め、鶴の千年亀の万年千代八千代に無息円満に、四神相応の地と鎮め申し奉る所なり。再拝リリ、敬つて申す。さらに続くが、これをもつてわが入来こそは「国歌君が代発祥の地」と云われる所以である。

また、隣接して梶原神社があり、そこには総石作りの鳥居が立っている。明治三十九年八月建立の文字はかすれて時の流れが歴史を思わせる。

地元のすぐ近くに昔、「石の場」といわれた採石所跡があり、ここで作られ、運ばれたのではないだろうか。およそ高さ四メートル横幅四メートルぐらい、柱の直径三十センチぐらいを想像すれば、地域の戦勝の満足が一方ならぬものがあつたに違いない。

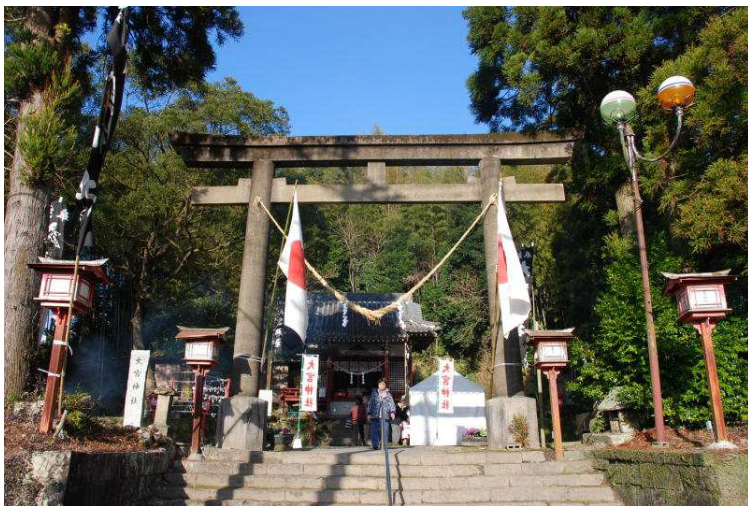
しかも、向かつて右側の柱の根元には、「征露記念」と刻まれているが、いうまでもなく、

「ロシヤを征服した」の意味である。従軍のわが日本兵士達は、「勝つてくるぞと勇ましく、荒野にラツパを轟かせながら、背囊の中には、腹痛みの薬の用心に「征露丸」を用意していた。それが証拠に、製薬会社の商標には、進軍ラツパのマークが最近までついていた。

ふと気づくと、ラツパのマークが変つているのに気づいた。

第二次大戦後、戦勝国のひとつから「ロシヤを征服した征露」とはなにごとかとクレームがあつたとか、無かつたとか。

そのせいかラツパとともに「征露丸」は「正露丸」にかわつている。つまり、「ロシヤを征服」が「ロシヤが正しい」になつたのだろうか。
(元入来町長)



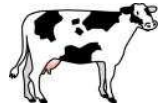
大宮神社 (2013年1月1日撮影)



入来神舞／十二人剣舞 (舞人は衛門隼人を象徴しているといわれる)

鹿児島大学入来牧場の

紹介と今後の課題



中西 喜彦

一、はじめに

早いもので、鹿大入来牧場と関係して、今年で四九年目を迎える。薩摩川内市入来町浦之名大谷に所在する面積一四七^{ヘクタール}の牧場である。薩摩川内市入来支所のある浦之名麓地区から鹿児島方面へ國道を五^{キロ}ほど走り、国鉄宮之城線バス停山下から九^{キロ}程町道の山道を登ると、牧場内に標高五一七^{メートル}の測量点を持つ高原が広がっている。また、農学部から二五^{キロ}、医歯学部から三十^{キロ}の位置にある。

入来牧場の敷地内には鹿大天体望遠鏡と隣接して国立天文台入来電波望遠鏡がその後設置された。道路越しの向かいに城山カントリー

ークラブ（前入来町営牧場跡）がある。

筆者は昭和三九年五月に鹿児島大学助手として、農学部に採用された。初仕事の一つは購入する牧場予定地の測量や地面図の整理、牧場建設の為の文部省への申請などの作業があった。当時八重山の入来町側に戦後満州などの外地から引き上げた方が住んで居られた民有地二二所帯分約百^{ヘクタール}と、国有林五十^{ヘクタール}の分譲を受けて、牧場建設作業が開始された。

鹿大は鹿児島高等農林学校時代に西之表市に四三八^{ヘクタール}に及ぶ大牧場を保有していた。その移転と云う形で昭和四二年八月に着工が認められ、昭和四三年四月から正式に運用されることになった。標高五百^{メートル}付近の山間部での牧場運営は大変なものがある。巷に云われている「土作り十年、草作り十年、牛作り十年」を地で行くことになった。その後の四十年目、さらに五十年目を間近に控える時期に

なった。

関与した教職員で今や鬼籍に入った方も少なくない。筆者も退職後十二年目を迎え、牧場の教職員も殆ど代替わりして居られる。今や入来牧場の由来を知る人も少なくなりつつある。

三年前の春、当時五年振りに再開された第七回入来薪能の主催者、入来花水木会代表入来院貞子氏を初めて訪問した。鹿兒島謡曲連合会長の立場で入来薪能の由来など謡曲連合会報への原稿をお願いの為である。それ以来知己を得た入来院ご夫妻を通じて、入来の歴史を肌で感じる事が出来た。入来院家は歴代の記録を保存してこられた「入来文書」でも世界的に有名である。鎌倉時代から明治初期まで約六百年に亘って同じ地域を領有された例は世界的にも希有である。同じ入来町浦之名に所在する鹿大入来牧場も本家のように

に百年、二百年と存続し発展して欲しいと切に思う次第である。

この度、庵主入来院重朝氏の勧めにより、在職中の三八年間を主体に、入来牧場の紹介と今後の希望について述べて見たい。

恐る恐る原稿(本誌七号に再掲)をお願いした身からすると。現状は「ミイラ取りがミイラになった」心境である。縁とは不思議なものである。

二、入来牧場設置の背景

戦後の学制改革により鹿兒島高等農林学校(後に鹿兒島農林専門学校と改称)も新制国立鹿兒島大学七学部中の農学部として昭和二十四年五月に発足した。昭和三十年代から発足当初の教育体制の見直しが行われ、農学部は体質改善のため昭和三八年四月、農学科、林学科、蚕糸学科および総合農学科を改組して、畜産学科、園芸学科および農業工学科を

新設した。畜産学科の構成は家畜育種学、家畜繁殖学、畜産化学、家畜栄養学および畜産製造学の五講座、一学年三五名の定員で発足した。

その際、広大な種子島の遺産を根拠に入来牧場が設置出来た。当時は乳肉卵の供給を増加し、国民の栄養を向上させたい時代であった。当時の種子島牧場は、戦中・終戦後の国家経済力の疲弊で十分な資金が得られず、これらの牧場施設も老朽化が進み前述のような新畜産学科の教育研究には対応出来ない状況にあった。

そのような中で、いつそ内地に種子島牧場を移転し、学内牧場と一緒にして新しい大学牧場を新設しようと云う考えが出て来た。当時畜産学科創設の立案者であり、学科主任であった西山久吉教授と当時の宇田川畏蔵農学部長の発案で新設学科に相応しい教育環境を

整える一環として牧場移転が計られた。

最初は鹿児島県の畜産関係代表機関を通じて、鹿児島県下の全域について牧場設置可能地の推薦をお願いした。その結果霧島、入来、大隅の三カ所の場所が推薦された。農学部内に農学部長、農場長、農場委員会、畜産関係教官、土壌肥料関係教官などで次の点について検討を行った。土質、水質、水源、土地の傾斜、気象状況、大学との距離、必要面積確保の点、地元の誘致に対する熱意などの項目である。その結果、入来町八重山地区が総合的に優れていると云う結論になった。

三、鹿児島大学入来牧場の概要

民有地と国有林分譲地の合計一四七畝のなかで管理棟地区と畜舎棟地区の土地造成が行われた。さらに、圃場、改良牧野、野草地などに区分して造成が行われた。国有林は樹木をなるべくそのままにして放牧牛の避難林的

な用途に当てられた。開拓地の跡は比較的傾斜の緩いところだったので、圃場や改良草地にした。しかし、現場は安山岩の点石や小石が多く、火山灰地でない利点はあるものの、土地の平準化や表土作りには随分年月を要した。特に牧場建設時の昭和四十年代初期にはまだ入手可能な大型土木機械は少なく、道路作りの際などマイルドで点石を爆破するようなこともあった。

牧場設計に当たって感銘を受けたのはまとめ役の西山久吉教授の慧眼だった。丘陵地の大胆な平準化による建物敷地面積の確保と一号から四号まで道幅九メートルの中央道路の設定だった。これには鹿大本部建築課の設計担当者も九メートル道路と云うと国道並ですよと吃驚していた。

しかし、先生はトラクターが草刈用のモーターを付けて移動する際トラクターが交差

するとどうしてもその道幅は必要であると主張された。当時はまだ車も公用車利用が殆どで、牧場開設後職員家族の移動用にジープの購入を申請するような時代であり先見の明だと思った。

お陰でその後のモーターゼーションに旨く対応出来ると共に、その後の牧場職員による牧野造成に大型ドザーショベル使用による自前の牧野造成を可能にした。また、搾乳用ミルキングパーラー室や牛乳製造装置などを置く乳製品加工室、ハムやソーセージなどの肉加工室も当時の最新機器と共に併設された。当初の規模は、次のとおりである。

○土地関係（建物敷地その他：四、三ヘクタール、耕地採草地十五ヘクタール、改良草地：五五ヘクタール、放牧地：七三ヘクタール）。

○建物関係（管理棟：六五九^二/_三m、畜舎棟（ミルキングパーラー）、乳製品加工室、肉製品加

工室を含む)：一九一〇²m、燃料棟：七²m、
 宿舎七戸：三〇二²m、その他：十七²m、合計
 二八九五²mであった。

四、入来牧場設置後の推移

畜産学科発足当時、乳肉卵の生産や加工に
 関係する専門家は少なく、講座の看板だけは
 掲げてでも家畜育种学は蚕種学、畜産化学は蚕
 糸化学、家畜栄養学は総合農学の中の農村生
 活科学の専門家が研究対象を代えるのである
 から自他共に大変な時代であった。ぼつぼつ
 関係の専門家が集まっても自分の講座を整備
 することで、牧場管理指導までは手が廻らな
 かった。

そのようなことで、直接牧場建設や運営に
 対応する部門は結局当時種子島牧場主任から
 本学農場主事になられた小山田巽助教授とそ
 の後任として種子島牧場に着任した柳田宏一
 助手が牧場担当者である。それに、唯一改組

前畜産学を標榜していた家畜繁殖学の西山久
 吉教授と、小川清彦助教授と筆者で当たるこ
 とになった。時期的に牧場の動向を大別する
 と四期に分けられる。

第一期は就職時の昭和三九年五月から昭和
 四三年四月の牧場開設までの実地測量、土地
 調査、作業監督、申請資料作成などを行った
 時期である。また、大学構内にある学内牧場
 も入来牧場に併合する昭和四七年までは実態
 は家畜繁殖教室で管理していた。

第二期は牧場新設後種子島牧場から着任し
 た当時の柳田宏一助手と相談しながら改良牧
 野や圃場の整備、所謂「土作り、草作り」の
 時期である。あえて区分してみると昭和五八
 年頃までの約十五年間が上げられる。

その間の人事として牧場生みの親の西山久
 吉教授は昭和四六年八月に九州大学に転任に
 なり、後任に小川清彦教授、中西喜彦助教授

および東條英昭助手で牧場運営を加勢することになった。また、牧場のような牛や豚を多頭飼育する分野の必要性を訴え、小川清彦教授の尽力で家畜管理学講座を昭和五十年四月に設置することが出来た。これで一学年定員四五名の大所帯になった。

昭和五十一年三月に畜産学教室出身で酪農学園大学農場講師をしていた萬田正治氏を助教授に迎えた。昭和五十六年四月に農水省中国農業試験場畜産部長の黒肥地一郎氏を教授として迎えた。肉用牛経営の専門家で牧場運営もいよいよ軌道に乗った。また、昭和五十八年四月には学内農場動物飼育棟が竣工された。飼育室六四九²m²と管理室一四七²m²からなるもので、学内牧場に点在した鶏舎、豚舎、牛舎および蚕室などを集約的に建て替えた物である。これにはマウス、ラット、ウズラ、鶏、野鶏、ミニブタ、ヤギ、牛、場合によっては鹿まで

飼育するもので、家畜を含む実験動物飼育棟としては全国農学部の中で唯一のものであった。

昭和五十九年四月に畜産学科創立二十周年記念事業を行い、その一部として牧神碑を、さらに五年後新たに南面に大石を配置した正門を設置した。碑銘は西山前教授、由緒書きを当時農場長だった小川教授が担当した。これは牧場職員自力の石集めと教官および同窓生二九六名の醸金によるものであった。

学科創立二十周年で所期の学科と牧場になったと思つた。結局西山先生の構想を小川、中西、柳田、十年程遅れて、萬田を加え達成したものであった。その要点は、「基礎学問を大切にす。和を持って尊とする。」の二点であり、学科内の融和、牧場内の融和を心がけた結果でもあった。

第三期はこの頃から平成二年四月の農学部

再編により畜産学科の六講座が生物生産学科と生物資源化学科に分かれるまでと考えられる。ここに、畜産学科や牧場の全盛期を迎える。牧場整備完了と学内動物飼育棟の完成はその後の若手研究者の各種学会賞獲得の基盤となった。放牧牛も平地で飼育される舎飼牛並みの能力を発揮できるようになった。昭和五八年五月に家畜繁殖研究室に着任した後藤和文助手を交えて全国的に行われ始めた牛の受精卵移植に関する研究を開始した。鹿児島県畜産試験場肉用牛部との共同研究を踏まえて、入来牧場と共同で体外受精卵の作出と移植、死滅精子の顕微授精による受精卵の移植を行い、いずれも産子を得て世界的業績となった。

また、昭和五三年三月に家畜繁殖に導入した雑ミニブタの系統造成を行い、牛だけでなく豚についても人工授精師資格を学科学生に

与えることが出来た。近交系として確立し、平成二年に学会誌に報告した。

第四期としては平成二年四月に農学部が改組され、生物生産学科、資源化学科、環境学科および獣医学科に再編され、小生が退職した平成十四年三月までの間である。学問の進展にしたがい従来の小講座としての教授、助教授、助手の体制から大講座制として従来の三小講座を一大講座にして、人事の流動性や研究の細分化に対応しようというものであった。

その結果畜産学科として牧場実習、製造実習、人工授精講習会などもそれぞれの大講座のカリキュラムの中で取捨選択されるようになった。

入来牧場も平成二年頃には二百頭規模の大型肉用牛肥育施設やその後七十頭規模の子牛育成施設を建設し、基礎の出来た牧場は肉用

牛の繁殖・肥育一貫牧場となった。

高原でも畜舎の中で飼育する場合糞尿処理が問題になる。そこで昭和から平成に変わった頃から牛の研究から「土着菌の活用など糞尿の堆肥化」などが研究されるようになった。

柳田助教は堆肥化をさらに進めて、大鋸屑床に土着菌を散布し、糞尿処理問題を一挙に解決する研究を進め、多くの賛同者を得ていた。

中小養豚業におけるし尿処理で、排水処理基準が厳しくなり、汚水処理施設を持った大型養豚場でない豚が飼育出来ないような状況になっていた。そこで、牧場に肉豚を導入し、牛だけでなく豚の土着菌床による飼育試験を行っていた。

以上のようなことで筆者は在職三八年間の内柳田主任とは二年間は学生さんとして、その後は入来牧場主任や農場主事として接触し

てきた。筆者停年退官後の二年目の一月柳田教授逝去との報があり、上京していたので、慌てて帰鹿し駆けつけた。肝臓がんで五九歳だった。お互いその時々々の大学牧場の方向性を模索して来ただけに誠に残念な出来事であった。

五、入来牧場に対する所感

物事を考える時「百年の計」と云うが図らずも種子島牧場と入来牧場存続期間を合わせると百年目を間もなく迎える。

まず、明治四三年に、鹿児島高等農林学校設置の一つの目玉として、今後の農業は米麦に代って、畜産や園芸を導入する必要があると云う玉利喜造初代校長の信念で乳牛主体の種子島牧場と構内牧場が設置された。最盛期は全国のチーズ生産量の三割はあったという。

次に、昭和四三年には農学部組織改革による畜産学科設置の一環として、乳肉生産と加

工までを旗印に incoming 牧場が設置された。大学牧場としては肉用牛、乳用牛、馬、豚、鶏などの多様な家畜を飼育したい。取りあえずは昭和五八年、学内に農場畜産部動物飼育棟をつくり、豚や鶏はそちらに収容した。

当初の incoming 牧場の目的は畜産学科や獣医学科の学生に実際の乳牛や肉牛および豚等の飼育管理や乳肉加工を教育することを最低の目標にした。学内牧場からは豚も上げて飼育していた。また、牛乳の大学構内での販売、ラムやソーセージなどの実習時の販売も行っていった。しかし、実際には色々な試行錯誤があった。まず、畜種としては豚の飼育を中止した。

これは乳牛の生産性が上がると乳牛の子牛が沢山生まれる様になり、放牧体制のため親は放牧であるが、子牛は豚舎を改造して飼育するようにしたためである。ところが一頭当

たりの乳量が増えるとなるとなるべく等間隔で搾乳するため時間外搾乳になり、超過勤務の恒常化になってしまった。さらに、公務員の定員削減制度の中で行政職二などの技官職は採用されなくなった。そのようなことで、搾乳業務に必要な乳牛飼育を中止し、今や肉用牛のみの牧場になった。他にトカラ馬とロノ島野生化牛が保存されている。

しかし、これまでの道のりは険しく、徹底した大型機械による土地の平準化、養鶏場から出た大量の鶏糞散布、漬け物や焼酎粕など有機産業廃棄物や牛糞の堆肥化などの絶間ない工夫と研究による土地作りや飼料確保があった。さらに、薩摩、曾於、始良からのブランド牛の系統造成も行われて来た。設置当初四百万円ぐらいの収入だったものが昭和五八年頃には四千万円ぐらいになり、最盛期は八千万円となった。

理想の大学牧場として乳肉卵の生産や加工に関する教育・研究の実践の場として、入来牧場や学内動物飼育棟を用いて努力して来た牧場も社会情勢や学内情勢に対応しながら現在に至っている。

また、このような本格的牧場で学んだ卒業生の産学官界における活躍は著しいものがある。しかし、今や入来牧場は肉用牛の繁殖・肥育一貫経営のモデル牧場になった感じである。これは大学農場が収入によって予算配分が左右される面があり、どうしても収入を上げざるを得ない。平地にある平均的な大学牧場と違い前述のように飼育畜種を絞り専業化の努力をした結果である。

以上のように時代を先取りしてきた牧場も現在は更なる発展策を考える時期になっていると思う。

六、入来牧場活用に関する提言

○提言の背景

畜産学科が改組された平成二年頃から学問の進展により畜産業で想定してきた技術開発が異種分野との技術交流に進展した。前述のように家畜繁殖学分野では品種改良の手段として人工授精や受精卵移植、さらに顕微授精や受精卵の体外培養技術が研究された。県肉用牛研究所の究極の種牛作成であるクローン技術の開発に貢献した。医学部産婦人科とは人の不妊治療との関連で注目されるようになった。また、産業豚の代わりに人工授精技術の開発の為学内動物飼育棟で系統造成していたクラウン系ミニブタを国立佐倉病院外科医長坂本薫氏や国立循環器病研究センター辻隆之実験治療開発部長（後東大工学部教授）などの参加を得て研究用ミニブタとして認識されるようになった。その結果、県畜産試験場

の性能試験を得て、(株)ジャパンファームクラウン研究所を設置してミニブタの増産が出来る様になった。

○鹿児島大学の対応

これらの動きに対応して鹿児島大学は平成十四年四月に鹿児島大学生命科学資源開発センターを発足させた。その中に医学部動物実験施設、医用ミニブタ研究分野、遺伝子実験施設、アイソトープ総合センターおよび機器分析センターが含まれていた。聞く所によると生命科学資源開発センターは文部省が資源(ミニブタ)開発を鹿大に依頼したことになるらしい。その為に医用ミニブタ研究分野にスクラップアンドビルで医学部と歯学部から定員削減の助手四名の定員枠を教授二名、助教授二名の組織として再編したと伝聞している。その後平成十七年に再編し、さらに本年若干の組み換えを行った。しかし、本格的研

究施設がないため、難渋している。

○クラウン系ミニブタとは

鹿児島大学で開発したクラウン系ミニブタは鹿児島県畜産試験場(株)ジャパンファームクラウン研究所を経て、今年四月からZOZ法人医用ミニブタ研究所で生産・販売を行っている。この豚の特徴は二歳時でも四十kg三歳時の最大体重でも六十kg前後であり、色んな意味で人のモデル動物として利用出来ることである。

さらに、生命のゲートとも云われる主要組織適合性遺伝子複合体(MHC)が確立しており、主なハプロタイプとして、C系とCS系の二種類の系統の存在が確認された豚の集団である。平成十八年十月に米国ハーバード大学生物移植研究所から山田和彦教授を招聘してからミニブタを用いた研究が進み出した。鹿大医用ミニブタ・先端医療開発研究センター、

臓器置換・異種移植外科分野の佐原寿史特任准教授の研究では同じ系統のC系とD系で肺移植をすると、全例一年以上、移植した肺が拒絶されないが、異系統であるC系とB系間で肺移植すると六十日以内に拒絶反応が起こり、生着しないと報告している。さらに、前述の山田和彦教授は米国において遺伝子改変で拒絶反応を押さえたミニブタの腎臓をヒトに移植して、八三日間生存させた経験の持主である。彼の狙いは異種移植と云う、拒絶反応を遺伝的に押さえたミニブタ脾臓、肺、腎臓、心臓、肝臓などを人間に移植出来ないかと云うものである。

現在、生命関係の分野で話題をさらっているIPS細胞はマウスの実験から人への臨床研究が進んでいる。しかし、個人ごとのMHCは異なっており、甲さんで旨く行ったことが乙さんで旨く行くととは限らない。既にクラウン

系でもDR細胞は作られて居るようである。もし、C系で作成したものは全てのC系では拒絶反応が起こらなければ、人と等身大だけにあらゆる組織や臓器で一斉に実験できることになる。これを進めて行けば前臨床試験として非常に有利なツールを手に入れたことになる。

○新しい研究の拠点づくりを目指して

鹿児島大学は将に生命科学資源開発の最前列に居ることになる。MHC純系ミニブタを保有し、研究や飼育の場所を提案出来るところは世界中で本学だけである。現在の鹿児島大学の状況はこれらのミニブタを用いた研究施設が出来さえすれば世界の生命科学研究のトップに踊り出ることが出来る。

大変手前味噌のようであるが、決してそうでないことを何点か説明しておきたい。一つはMHC純系ミニブタで量産して販売出来るの

は世界中でクラウン系だけである。二つ目は、ブタを一定頭数飼育する場合環境関係の法令で規制されている。さらに、疾病制御のため周囲にブタの飼育が行われていないことが必要である。その点前述のように、広大な牧野や樹林をもち大きな問題をクリヤー出来る。三つ目は鹿児島県の気候は温順でブタの飼育に向いており、ミニブタも例外ではない。全国で生産される肉豚一千万頭の内三割を鹿児島と宮崎で占めていることでも明らかである。

四つ目はミニブタに関係してこの三十五年間に、系統造成、性能試験、MHC系統造成を大分県、畜産試験場および(株)ジャパンファームで行われてきた。立場や職場は異なってもかなりの関係した人が鹿大の学生や卒業生である。そして、畜産界を背景に非常にブタに関する知識や技術が高いことである。五つ目に陸海空の交通網の整備で各地からの研

究者のアクセスが格段に向上したことである。以上のようなことから筆者は本格的生命科学資源開発研究の拠点形成に名乗りを上げる時期だと考える。

○狙いは臓器置換・先進医療の研究

医学の素人として誤解を恐れず云えば、遺伝子組換えをして拒絶反応を押さえたミニブタの肺臓、心臓、腎臓、肝臓、膵臓などを作成し患者さんに移植することである。

平成九年九月ごろ当時国立循環器病センター研究所実験治療開発部長をしていた辻隆之氏の訪問を受けた。一緒にクラウン系ミニブタを使って異種移植の研究を出来ないかというものであった。理由として、かなり人から人への臓器移植が行われる様になったがセンターの慰霊祭の際、「臓器提供者の親族から臓器を提供した人は無事天国に行けただろうか」など聞かれるとどうしても居たたまれな

い気持ちになる。やはり移植医療として完成させるにはミニブタを用いた異種移植しかないということであった。

丁度その頃性能試験を行い繁殖、遺伝、サイズ、温順さなど研究用ミニブタとして優れているとして、県畜産試験場から鹿児島の実験動物産業育成の一つとして、(株)ジャパンファームへ分譲された頃だった。これを医療用材料に開発すると云うことで医用ミニブタ研究会を設置し、供給元の(株)ジャパンファームと活用側の鹿児島大学に拠点を置くべく全国展開で広報を始めた。辻隆之氏は平成十二年四月に病気で倒れてリタイアされたがそれから十三年経つ。

そのような経過で再度ミニブタをみると当初の兄妹の雄一頭、雌二頭から近親交配を開始して三十五年、三十世代を超えて千頭までの販売が可能な状況になっている。その間、

最初の雑ミニブタは日本配合飼料中央研究所(三井物産系)で作出された。鹿大で近交系統造成後、県畜産試験場の性能試験は丸紅が鹿児島県に畜産分野のバイテク産業開発の目的で提供した資金一億円で行われた。さらに、三菱商事系のジャパンファームクラウン研究所は五億の設備投資と十五年間のベテラン所員の研究により、^①純系ミニブタの量産が出来るようになった。以上のようにミニブタだけでなく鹿大と県さらに三大商社が関与している。

○新医療産業の育成

哲学問答のようであるが異種の臓器置換に關しては、「口から食べて命を繋ぐか、お腹から入れて命を繋ぐか」という課題がある。一般的には豚肉は食べてもお腹から入れるのはどうかと云う考えである。このような生物としての本質的問題は二十年以上前の不妊治療

においても論議された。しかし、現在は四十歳まででは不妊治療の補助費を出すような時代である。ルーズちゃんの外受精卵としての出生以来二百万の体外受精児が誕生したと云われている。人は神の領域に手を出してしまった。

臓器の代用となるミニブタ素材が開発されたので、拒絶反応さえ抑制出来れば、患者のサイズに合わせた臓器の利用が可能である。もし技術が完成すれば子孫に問題を残さず、個人レベルの問題であり、かえって受入れ易い面が多いと思う。このような問題をクリアーすると各臓器の価格は車並みの値段が想定され、新しい産業として成立つと考えられる。

今年四月に選任された前田芳實鹿児島大学長は畜産学科の第一回生であり、学生、助手、助教、教授、農学部長、本部研究理事と云う経歴の持主である。丁度五十年間色々な立

場で鹿児島大学と喜怒哀楽を共にして来られている。この案件が世界の生命科学進展の突破口になるようにご指導頂くことを切望している。

七、おわりに

牧場開場の年、昭和四十三年版入来町勢要覧が見つかった。この年は町制二十周年、明治百年記念の年である。

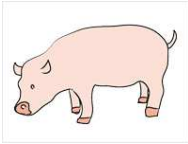
当時の町長は松下充止氏で三期目の実力町長であった。大変お世話になった記憶がある。また、この年は鹿大入来牧場だけでなく、県身体障害者職業訓練所が設置されている。以後入来町への企業の誘致などが進められていた。

最近では清色城跡と入来麓伝統的建物群保存地区としてその一面に、茅葺屋根の増田邸復元で話題を呼んだ。付近には入来文書を置いた武家茶房MONJOも開設した。入来郷土

館を覗くと国立天文台の広報冊子が置いてある。入来が文化や学術の町をめざしていることが伺われる。このような背景の中で鹿大入来牧場が生命科学研究の最先端の場になることを期待したい。

本文が入来関係の方々の目に止まり入来町南部八重山における最近半世紀の動向を理解される一助になれば嬉しい。また、新たな百年に向けて入来町や入来牧場が益々発展することを祈念して稿を閉じたい。

(鹿児島大学名誉教授)



採草地（約5ha）を含む施設建設提案地（町道より鹿大入来牧場を見る）。右に①乾草の梱包、中央上に②鹿大天体望遠鏡、左に③天文台電波望遠鏡が見えます。

瀋陽の警官は笑顔と共に

「アリガトウ」と言った



花街（隠居） 澁谷 繁樹

二〇一三年六月七日正午ごろ、大連に向けて時速三〇〇^キ以上で突っ走る中国高速鉄道の二等席で駅弁をかつ喰らいながら、瀋陽（日本統治時代は奉天）の交通警察官から笑顔とともにかけられた「アリガトウ」の言葉も噛みしめていた。

瀋陽に入ったのは、六月三日の午後七時半、緯度の高い中国平野をしつこくついてきた夕日も流石に退場して、瀋陽北駅は薄い闇に包まれていた。市街地に入ってから沿線も営みの明かりが少なかった。十月に日本で言う

国民体育大会の主会場となるから競技場の新設などに電力を振り向けているのだろうと思いつながら、影絵で揺れる人の波を泳いでタクシー乗り場の列に並ぶ。

反日デモに高速鉄道の派手な事故。日本から見ると、悪印象が強い最近の瀋陽だが、本当に日本人が気楽には歩けない街になってしまったのか、考えていたら、中国の知り合いから、日本の人は今の中国にどんな視線を投げかけているのか、教えてほしい、瀋陽の現状を把握してもらってから話し合えないか、と誘いが来た。

中国はビザなし訪問で、最長二週間は滞在できる。旨い饅頭（マントウ・一次発酵で止める大きな蒸しパン）がある大連も旅程に入れ、五月二八日に福岡から大連に入った。六〇〇万人都市の街はどこもかしこも高層ビルの建築中だった。提供された寝床は、中心も

中心、街の真ん真ん中の四二階建て、窓の下には建設中の地下鉄、見上げると大連で一番高くなる九二階建てのビル建築現場で、既に七〇階を超える高さに聳えていた。

朝、午前五時過ぎ、歩いて一〇分ぐらいの露天朝市に顔を出す。饅頭屋には、もう、行列ができています。餡子入りもあるけれど、目当ては具なしで一個一元（一六円）、巨漢。プロレスラーの握りこぶし二つ分になりそうな大きさで、一〇個買ってバッグに入れ背負うと、肩にズシリと来る。荔枝（ライチ）も日本で冷凍物になじんだ舌に衝撃が走るほど、生は、水が甘さと妖艶さをまといながら結晶した逸物で、楊貴妃の好物という故事に領きたくなる。

大連は再訪になる。祖父が南満州鉄道勤務父はハルビン中学校の最後の卒業生だった。中央大学で学徒召集された父を除き、祖父、

祖母、叔母の三人が、大連の港から日本に引き揚げています。引き揚げ船が出航した大連港第三埠頭が改修工事を取り壊されると聞いて、二〇〇七年に訪れ、掌を合わせてきた。今や大連の港は世界一の規模を誇る貨物旅客港に変貌しようとしている。



朝の六時には行列ができる大連の饅頭屋さん



六年前に撮影した大連港の第三埠頭。日本への引き揚げ船が旅立った埠頭も今はない



例外なくブツ飛ばす車の流れに身を投じて
婦人警官が交通整理

○七年の旅は運転手さん付きの車で移動したので、今度の旅で初めて大連のタクシーを利用した。怖い、怖い、第一、乗れない。相乗りが許されているため、複数の客なんか拾おうともしない。四人連れが乗ろうとすると、一人が止める役、あと三人は物陰に隠れる。首尾よく止めたら、物陰から後部座席に飛び込む。運転手の大声での文句、盛大な舌打ちを無視して行き先を告げる。行き交う車は、ベンツ、アウディ、フォルクスワーゲン、レクサスと高級車だらけなのに、タクシーはオンボロ、車内も汚れ放題、運転手さんも車に負けないくらいになりで、助手席に座ると、体臭を我慢する羽目になる。

人口八〇〇万人を超える瀋陽ではタクシーの相乗りは許されていなかった。車両も運転手さんも大連よりタチが良かった。同じ遼寧省の省都が瀋陽で第二の都会が大連、おん

なじ制度にすりや良さそうなものだけでも、大連の日本通の若者に言わせると「大連はシヤカシヤカ、瀋陽はオットリ。大阪と京都、でしようかね」。成る程ね。薄闇に包まれた瀋陽北駅、タクシーに乗る番が回ってきた。

整理と監視役の警察官が「リーベンレン（日本人）？」と、笑顔を浮かべながら聞いてきた。「ええ」と日本語でこたええると、「アリガトウ」とさらに目がほころんだ笑いと日本語が返ってきた。餃子の発祥地・瀋陽の開業一〇〇年以上の餃子店、行列が出来ていたのでウマイカモと踏んで店に入り、ダンナと煙草をやりとりするくらい仲良くなかった肉饅屋、柳条湖事件に端を発した満州事変を日本の侵略を忘れてなるまいぞとの展示品で溢れている9・18記念館、煙草屋の長い茶髪の新エチャン、どこでも誰にも、あからさまな敵対の目には出会わなかった。「一度に四

人も乗せたら、ほかの客が拾えないじゃないか。オレはどうやって生活するんだ」と大連のタクシーの運転手さんからブツブツ言われたのが、敵視と言えば敵視になるかなくらいだったし、同じ大連のタクシーでも「妹がヨコハマで働いていてね。ニホンはいい国だつて聞いているよ。尖閣のケンカなんざ政府に任しときゃいいさ」ってな日中友好劇もあったりした。「新聞とテレビは切り取り方が一面的だからな」と実際に歩き回った感想を述べたら、「アナタは新聞記者じゃなかったんですか」と、中国の知人から足をすくわれてしまった。

旅の最終盤で中国富豪の一人から超高級海鮮料理店に呼ばれた。話し合っていたら、彼の人物の御祖父も満鉄勤めとわかり、乾杯また乾杯。杯を重ねるにつれ、つつい漢詩を披露したら、彼は即座にスマートフォンを

取り出してインターネットでチョチョイのノチョイ、おお、今のは長恨歌ですね、スンバラシイと、普段は忙しくて酒を飲む暇がないという人が深酒に溺れる夜となった。中国でも指折りの書家になにか書いてもらいますからと頻りに呟いていたから、そのうち、掛け軸が送られてくるかもしれない。

瀋陽から帰る高速鉄道の最高速度は、時速三〇六キロだった。一五〇元の最高級駅弁の中身は、牛の煮込み、豚の炒め、胡瓜と唐辛子の醬油漬、カップスープもついていた。広すぎて飛ぶように流れるとはいかない車窓だと速度は感じないし、駅弁のスープもさざ波も立ってない。「さつきバイキングの朝食をあれだけ食べたばつかしなのに、ホテルが倒産するくらい詰め込んでるのに、よく入りますね」と同行者にあきらめながら、だっておいしいんですから、これで煙草が吸えりや



かなりイケタ中国駅弁。カップスープには「ワカメ玉子スープ」と日本語もついていた。

言うこたないんですがねと弁解していたら、乗務員や鉄道警察官がバタバタと前の車両に走っていく。どうやら完全禁煙の列車内のトイレで一服つけた輩がいたらしい。道でもどこでも吸い放題なのに、決めたとなつたら、警察まで動員して取り締まる。そういや、ひっくり返った傷を持つ高鉄だった、神経質に気を遣うのも当然か、あの警官の笑顔もアリガトウも国家歴史文化名城指定の瀋陽だから当たり前なのかもなと駅弁の後口を度数の少ない青島ビールで洗いながした。

(NIE—教育に新聞を—鹿児島研究会事務局長)



時の過ぎ行くままに (3)



「炉ばたセイ談」にかけた貞子さんの夢

桐野 三郎

※ 噛み合わない夜

夕食が終わったテーブルの向う側。久しぶりにやってきた中2の孫(男)と母親(ぼくの娘)が、何やら高校進学について相談し合っている様子。こちらはまだ終わっていない晩酌の焼酎グラスを片手に、テレビを横目で見ながら聞くとともにしに聞いている。

「グローバル化のスピードは早いわよ。これから先は英語べらべらでなきやもう生きていけない時代よ。社内公用語が英語なんて会社はどんどん増えていくんだから——」

——なるほど。だけどそんなに増えていく

だろうか? 「格差社会って分るでしょう。お金持ちと貧乏人の差がますます広がっていくの。就職だってよっぽど頑張らないと、正社員になれなくて一生派遣社員のままなんて人もたくさんいる時代だからね。来年は高校入試に向けて全力投球よ。いいわね!」

——なるほど、なるほど。子供たちもたいへんだが親もけっこうたいへんな時代なんだ。

「でも、久しぶりに来たんだからお爺ちゃんの意見も聞いてみたら?」

やがて娘は、回答をぼくの方に振り向けてくる。だが、もともとこの種の話題で娘たちと意見が一致することはほとんどない。とことん議論すればするほどケンカ腰になってくるのだ。娘のほうは娘のほうで「また時代おくれの古くさい理屈ばかり並べて——」と思うのだから、こちらはこちらで「まだまだ

人生の何たるかがまるで分かっている。困ったもんだ！と苛立ってしまうというわけ。いつも消化不良で後味の良かった例がない。

だがここは売られたケンカ。いや、まさかそういうわけでもないだろうが中2といえ、あの戦争が終わった夏のぼくがまさにそうだった。(こんなに幼かったのだろうか？ 夜な夜な「死」を考え続けていたあの頃の俺が) そんな感慨もあつてテレビは諦め、孫に向き直る。もちろん焼酎グラスはそのままちびりちびりやりながらだ。

「うん、さつきからちらちらと聞いていたけど、お母さんの言うとおりでと思うよ」と、まずは娘の顔を立ててから、

「だけどお母さんが考えているこれから先— という未来はせいぜい十年先か二十年先ぐらいのことだと思うんだ。だけど君が考えなければならぬ未来というのは五十年先か六十

年先のことだろうか？ そんな先のことは誰にだつて分かりっこないのだから、そんなに難しく考える必要はないさ。まずは良い友人をたくさんつくって伸び伸びと青春を楽しむことが先だよ」と、ここはやはり本音で応えざるを得ない。

「でも英語はやっぱりこれから絶対必要？」
「いやいや、英語だつて日本の学校で教える基本をしっかりと勉強しておけば大丈夫。英語圏の国に入つてすこし馴れれば話せるようになるんだから。俺だつて、はじめてアメリカに出張したとき一週間目にはもうそんなに不自由しなかつたからね」

かなりの誇張はあるが全くのホラでもない。「でも社内公用語が英語なんて会社が増えるんでしょ？」

「いや、僕はそう思わないね。いま日本に二社あるらしいけど、そんな馬鹿な会社、君が

大学を卒業するころには潰れているんじゃないか？ そんな心配するよりまず日本語で、堂々と自分の意見を言えるような勉強することが先だよ」

「安定した職業ってどんな仕事だろう？」「ハハハ、そんな職業がこの世にあるわけないさ。そりゃ五年や十年は安定しているかもしれないが、君は四十年、あるいはそれ以上働かなければならないんだ。楽しく仕事をする条件は誰ひとつ『人生、好きなことをやるっきゃない』とシンプルに考えていればいいさ」

この辺までくると、孫の顔もかなり明るさを取り戻してくる。

「ついでにもう一つアドバイスしておくが、『不作為のミスだけは絶対に犯さない』という信念だけは持っていたほうがいいよ」

「不作為のミスってどんなこと？」

「あのとき『やっておけば良かったのに』と

後悔しても取り返しのつかないことをやらなかったという、そんなミスのことさ。たとえば君のクラスに仲良くならない素敵な女の子がいるとするだろう。それなのにいつまでもうじうじして声もかけられないーそんな失敗のこと。思い切って声をかけてみるぐらいの勇氣を持っていなくっちゃ一生後悔することになるぞ。いるんだろう？ そんな女の子」

照れているのだけれうが、ここにきてはじめて孫は笑顔になった。「頑張ろうぜ。お互いにな」と、手を差し出すと「はい、有り難うございました」と元気よく握り返してくる。

これで爺いの役割はひと先ず終了というわけだ。

だがこの間、娘のほうはやはり自分の意見が完全否定されたようで面白くないのだろう。聞こえないふりをしてテーブルの反対側で家内相手に世間話に耽っている。

※ モノサシの違い

人間の幸、不幸は常に相対的な価値観ではない。どんな幸せもより大きな幸せに比べれば不幸だろうし、どんな不幸もより過酷な不幸に比ぶればまだ幸せ—といえるようにだ。

いまの時代を「厳しい競争社会を生き抜かなければならない不幸な時代」と把えているらしいぼくの娘は、もちろん自分たちが体験してきた日本の高成長時代を基準にして現代を眺めているのだろう。それに対してぼくの場合は、どうしてもいわゆる「戦前」の暗い時代と比較して「いま」を考える。先ずは飢える心配がない。その上に自由にモノが言える平和が七十年近くも続いているのだ。日本の歴史はじまって以来最高に幸せな時代と把握しているわけである。ちっとやそつとの競争



なんてあって当り前。それを「たいへんな時代」などと吹き込むから却っておかしなことになるんだよ—と。つまり、子供の将来を考えてアドバイスしているという点で同じなのだ、思考の原点が違うと答えはこんなにも違ってくるというわけだ。

ぼくと娘とのこういう意見の食い違いを、俗に「モノサシが違う」という言い方がある。たしかに他人と意見交換するときに分身のモノサシだけで押し通そうとするとどうしても摩擦が生じやすい。ケンカ別れになったあげくには「奴とはモノサシが違う！」と匙を投げ出したりするときよく使われる。

もちろんその摩擦を解消するためには「多角的にもものを見る力」—つまり時と場合にに応じて相手に分かり易いモノサシを上手に使いこなせる、そんな力（知性）が必要なのだろうが、知性とやたらに遠いのがわが家の家系の

ようである。

いや、それでもわが家の場合は、まだ嫌な顔はされても暴力や紛争にまで発展する心配はないが、最近では日本の政治家たちがひとりよがりのお粗末なモノサシを振り回し過ぎるのが危なっかしくて見ていられない―そう感じはじめているのは、ぼくだけだろうか？

※ 主観と客観の落差

「いらっしやいませ。毎度ありがとうございます。」

昔、百貨店の新人教育はまずこの接客用語の練習から始まった。奉仕課（という課があった）のベテラン女子社員の指導で練習を繰り返した後、各自の声をテープに吹きこんで全員の前で再生して聞かせるのだ。これは高卒、大卒、男女を問わない基本訓練である。

だがぼくは東京で大学生活を過ごした身、標

準語にもそこそこ馴れているはずだからと、全く苦にすることはなかった。が、だ。ぼくの声が教室中に流れた途端にまさかの大爆笑が起ったのだ。五十人ぐらいたった新人の九割近くが女性である。彼女たちの視線がいつせいにぼくの方に向けられたときの恥ずかしさはいまもありありと記憶に残っている。

理由はもちろん、自分でもすぐ分かった。すっかり発声しようという気持ちが強かったせいもあつたのか、ドスの利いた低い声が、まるで下っ端ヤクザが玄関口で客人を迎えるときの口上そっくりだった。正直に言ってみてもびっくりする発見だった。つまり、主観と客観との落差はかくも大きいのか―と。

いや、こんな経験もぼくだけではないだろう。得意がつているポーズがはたから見れば滑稽でしかないケース。卑近な例を挙げさせてもらうが、東京都の猪瀬知事が先般、オリ

ンピック開催地誘致でライバルのイスタンブールの悪口を言って世界のひんしゆくを買ったときも、ぼくは反射的に自分のあの失敗を思い出した。つまり、自分を際立たせようという意識が先ばしかったばかりに、競争相手の悪口を言ってはいけないという禁じ手に触れて墓穴を掘ってしまったな」と。

だが、ここまでくるとついでに言わせてもらいたいのが、やはり日本の政治家の表情(けつして美醜ではなく)や態度のことだ。首相以下いちいち例を挙げたらきりがなが、朝夕のTVで目にするたびに(頼もしき)よりどうしても不安の方が増幅していくのだ。これもぼくだけではないはず。必要以上に力んだり威張ったりと肩に力が入り過ぎ、かと思えば笑う必要もないところで意味不明の笑みを浮かべてみたりと、どこかちぐはぐ。これでは日本の政治が三流といわれるわけだが、

これもつまりは己が、客観的に見ればどう見えているのかーが分つてないという実例だろう。又々百貨店の例を引いて恐縮だが「人間は一日に少くとも三、四回トイレに行く。

トイレにはほとんど鏡がある。鏡に向き合う度に微笑んで、自分のどの表情が最も美しいかを勉強しなさい」と教えるものだった。一年間で一千回以上の練習ができるわけだ。あの政治家たちもなぜそれぐらいの努力をしないのだろうか？ いや、本音をいえば「日本人としてサムライの風格を！」と申し上げたいのを、ばくはかなりハードルを下げて言っているのだ。いまやTVに映る表情は口元のしわ一本まで瞬時に地球の裏側まで届くという時代。しかも閣僚級の表情ともなれば、わが国に対する世界の好感度まで左右しかねないのだがー。

昨年京都を旅した折にバスガイドが、「カ

ラオケは歌う極楽、聞く地獄」といつて笑わせていた。カラオケではないがTVにて得意になっていいる政治家も、露出が多いほど人氣が上るとお考えのようだが、その逆もけっこう多いのではないか。



※ 戦争前夜のニオイ

ここ数年来、いや、もっとはつきり言えばカッコつけたがり屋の石原慎太郎東京都知事(当時)が、アメリカ議会で尖閣諸島を東京都が購入すると言い出して以来だが、日本中の空気が一変した。だが、といってもこれはぼくらの世代(戦中派)だけが感じ取る空気が漂い始める、いわゆる「戦争前夜」のニオイが漂いはじめたことが如実に感じられるのだ。

ぼくが生まれた年に満州事変(そう呼ばれていた)が始まり、小学校入学前年に支那事変が、さらに小4では大東亜戦争に突入、中2で日本中が焦土と化して敗戦に至るのだが、その間の記憶はもうかなり曖昧なのに、日常生活の中に流れていた空気感だけは妙にリアルに記憶の底にこびりついているのだ。殊に大東亜戦争(いわゆる二次世界大戦)に突入する前の空気はいまの日本とそっくりだった。それまでは話題にも上らなかつた相手国の欠点や汚点を次々に暴き出しては敵対感情を煽り、自国の正当性に賛同しない自国民すら敵視しはじめるといふ陰湿な空気。戦争前夜のニオイとはそんな空気感のことだ。「嫌中派」に対して「親中派」を差別しはじめたかと思えば、さらに「媚中派」などというもう一ランク上の敵役を設けて、アグネス・チャンや谷村新司という国際的なミュージシャンまで

槍玉にあげはじめた。いや、そればかりか、ちよつと相手国の長所や美点に触れたばかりに「利敵行為」とか「国賊」などという非難の言葉を浴びせる例も出てきた。おぞましくも、ある意味では懐しい少年の日の記憶が甦ってくる。

これはもう半年ほど前のことだが、東京在住の同級生（高校時）が久しぶりに帰省したのを機に地元勢二人との夕食会を開いた。男ばかりの席だけに酔いが回ると、話題やはり時局問題に向っていく。

地元勢の一人（税理士）が、自衛のために核武装すべきだという持論を展開し始めたのに対して、いま一人（面白いことに彼も税理士）が「何をバカな！尖閣なんてあんな岩だらけの島なんか中国にくれてやればいいんだ」と反撥して、議論はにわかには沸騰しはじめた。いや、沸騰したのはウソではないが、二人の

劍幕の激しさに中間派のぼくと東京からきた友人の二人は、半ば呆れながらほとんど聞き役に回ったのだが――。

同じ年齢で同じ時代に、しかも同じ税理士の世界で生きてきた二人なのに、こうも違う意見を確固たる自信を持って（そう見えた）主張しあう姿が驚きだった。たしかに二人の性格はかなり違う。核武装論者のほうは生真面目で融通性には欠けるかもしれないが、読書量を誇る勉強家だけに理論的にも完全武装しているつもりだろう。それに対して「尖閣不要論者」のほうは商工会やライオンズなどの活動で海外出張も多い上に、英語堪能で通訳もこなすという融通無碍の国際派。それにしても「多角的にモノを見る力」なら二人のキャリアや年齢などからも十分に備わっていてもいいはずなのに――である。

だが、これもたしかにぼくの言う戦争前夜のニオイがするひとつの光景には違いないのだが、先に触れた少年時代の記憶とは天と地ほども異なる相違点があることだけははっきりしておこう。当時の日本は軍国主義の厳しい統制下、迂闊に「尖閣不要論」など漏らすものなら即、憲兵隊に連行される―そんな恐怖と隣合わせだったという一点である。今はもちろんそんな懸念などどこ吹く風、笑いのうちに論争を打ち切って二次会のカラオケでは懐メロの喉を競い合っていた。

そして、さほどうまくもない懐メロを聞いていると、浮かんでくるのはやはり「俺たちは自由にモノが言えるという、なんと平和な時代を生きていることか―」という感懐である。四人とも中2で終戦を迎えた仲だが、それまでは校庭正面の忠魂碑に、ぼくらよりちよっと前に生まれたばかりに戦場で散ってい

った先輩たちの名前が、次々に刻まれ続けていたのだ。

※ 戦争はもう始まっている

だが話がここまでくると「では戦争前夜の次は開戦？」と問われそうだが答はもちろん「ノー」だ。たしかに二十世紀は破壊と殺戮の時代だったがいくらなんでもこの人類があれほどの愚拳をいま一度繰り返すはずがないいや、そんな楽観論は別としても、いまや世界中には地球上の全人類を抹殺しても余りある核兵器が温存されているのだ。そしてその核がとりあえずは全面戦争の抑止力として機能していることも間違いない。

しかし、とはいっても地球上各国(東アジアの近隣国はもちろん)の文明発展の足並みは一様ではない。政治体制の異なる国々が平

和裡に共存するためには、まだまだ多くのト
ラブルを忍耐強くクリアしていかなければな
らないであろうこともまた事実。という状況
下で、いまわが国に必要なキーワードはやは
り「外交力」しかないだろう。

そうなのだ。「外交は武器を使わない戦争
である」という言葉は情報が瞬時に地球上を
駆けめぐる現代、いよいよ現実味を帯びてく
る。その意味では、前項で「戦争前夜のニオ
イ」と書いたが実は「戦争はもう始まってい
る」といったほうがより真実を衝いているの
かもしれない。そしてその外交を担っている
のはもちろん政治家だけではない。朝タメデ
ィアに登場する人たちの言動や、われわれを
含めた「世論」の動向までが重要な要素とな
っているわけだ。

そんな目で見ていまの日本は、この東アジ
アでの大きな戦争（大げさではなく天下分け

目の）を有利な展開に持ちこめているのだろ
う？

残念ながらこれも答は「ノー」だろう。あ
まりに思慮不足の凡ミスが多くて呆れること
が多い。触れる必要もない場面で靖国問題を
持ち出すかと思えば、いまさら聞きたくもな
い「侵略の定義」を講釈してみたり、かと思
えば一方にはひとりよがりの「慰安婦問題」
を持ち出す不見識な党首が出現したりと外
交という戦場でもいまの日本はまだどこか頼
りない。

だが、さきの参院選では自民党が大勝。念
願の「ねじれ解消」にも成功したことだし、
今度こそ阿部政権の奮起に期待したいものだ。
これからの十年。ないし二十年が日本の正念
場ではないか。



※ 発信していきたい「希望」

ところで「炬ばたセイ談」も今回で第九号。振り返れば第六号までが初代編集長入来院貞子氏によるものだ。氏が二年前の五月に急逝、今年五月にはNHKテレビ「家族に乾杯」でご縁のできた、笑福亭鶴瓶師匠まで迎えて三回忌の法要が盛大に営まれたことは衆知のとおり。ぼくも末席に連なりながら貞子さんとの出会いを懐しむと同時に、彼女が「炬ばたセイ談」にかけて夢に思いを巡らせていた。

同人誌と言えば、古いぼくらは夜な夜なガリ版切りに精出しながら創りあげていた高校時代が懐しいのだが、この「炬ばたセイ談」も創刊号の編集後記を読むと「大変お待たせいたしました」と、どこかそれに似たわくわく感が伝わってくる。続いて「先ずはお読み下さい。内容は硬軟、左右なんでもありの画期的なものとなりました」などと。

そもその母体となる「炬ばたセイ談会」も言い出しっぺは貞子氏。それに呼応する形で鹿児島ペンシルクラブの相星雅子代表以下が賛同してスタートした経緯を、創刊号に相星氏が書いている。つまり「炬ばたセイ談」は種子を播いたのも貞子氏なら水をやり続けた（編集）のも貞子氏。それが芽を出し、育ってきたのだから。「炬ばたセイ談」は入来院貞子氏が遺していった彼女の分身と言ってもいいのかもしれない。

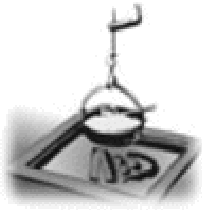
しかし執筆者は多士済済。一家言を持つ人が多いだけに、ありきたりの「仲良しクラブ」とは空気が違い例会では激論が飛び交うことも珍しくない。創刊号の相星氏のエッセー「ぐぬぬぬぬ」というタイトルは、メンバーの中では最右翼、入来院重朝氏の「日本核武装論」に対する反撥の歯ぎしりだろう。相星雅子といえは「憲法九条を守る会」のリーダー、当

然の抵抗である。東アジアの国際紛争で緊張が続くいま、国の未来を憂える心情は誰しもあつて当たり前。むしろ、創刊号からこんな衝突が見られたのがいかにも「炬ばたセイ談らしい」と言つてもいいのではないだろうか。

そしてその貞子氏が最後の編集を手がけた第六号の編集後記（平成二十二年）で新会員の中西氏を紹介している。「鹿児島大学農学部名誉教授、鹿児島謡曲連合会会長中西喜彦氏に加わつて頂きました。いよいよ会の幅が広がり、洛陽の紙価を高めることになるのではと期待するものです」と。まさか自分の運命を予感されていたわけではないだろうが、それからわずか一年を経ずしてご自身は他界。なんと、編集という難儀はその新会員中西喜彦氏に継承されて、いわゆる「貞子分身」である「炬ばたセイ談」は第七号、第八号と新しい命を誕生させてきたわけだ。

あの三回忌以来ぼくは、「洛陽の紙価を高める」なんて大それた望みは別としても「炬ばたセイ談」にかけた貞子さんの夢だけは大切にしたいものだ、いつも童女のように明るかった彼女の顔を思い出すことが多くなつた。そんな折りも折り、地元新聞紙上で出合ったほんの数行の言葉がひとつの啓示のようにぼくの目に飛び込んできた。創業百周年の岩波書店社長に就任した岡本厚氏を紹介した「かお」欄。出版社が果たす役割とは何かに対して「時間をかけて多角的なものを見る力、そして希望を発信していく」と答えている。

いや、なにも天下の岩波と肩を並べたいわけではないが、入院屋敷の一隅から生まれた「炬ばたセイ談」も、形は小さくとも執筆者たちが目指す狙いは同じだろう。内容は硬軟、左右なんでもあり―を楽しませてもらっているのだが、その成果の評価者は何十年か



後のぼくらの子や孫の世代。せめて彼らの評価に耐え得るものが「何か」だけは常に念頭に入れておきたい。その明快な答えが向こうから飛びこんできてくれたというわけだ。「多角的なものを見る力」はまだまだこれからだが、「希望」についてはぼくらだからこそ発信できるものがあるはずだ。対極の「絶望」しかない時代を知っている世代なのだから。中2の夏、八月十五日までぼくはその中であがいていた。

(エッセイスト)



第1号（平成17年）から第8号（平成24年）までの「炉ばたセイ談」

編集後記・・・

■九号をお届けします。執筆者の皆さんには心よりお礼申し上げます。貞子さん存命中原稿が集まらないうちも出版費がかかるこの悩みを聞いていました。何とか無事脱稿出来たことは庵主重朝氏と桐野会長のご指導のお陰と思っています。

貞子さんは歴史家として、渋谷五族下向七百五十年記念事業、七回の入来新能開催、入来文書の解説など後世に残る仕事をしてこられました。本冊子はその延長線上にあるものと理解しています。

年に一度、日頃関心のあることを文に纏めて冊子に発表し、それを肴に一杯飲むと云う趣向は誠に結構な試みだと思えます。何とか続くよう、今後共宜しくお願いします。(中西喜彦)

■九号も、レイアウトとイラスト挿入および印刷所との折衝を担当させて頂きました。冊子としての体裁を整え、誤植などが無いかの最終確認の作業になります。できるだけ読みやすい冊子になるように心がけ、余白が生じたところにはイラストを挿入しますが、イラストが煩わしくなるのも問題です。写真の大きさなども考えたいです。ご意見を頂戴できれば次回に生かされます。(下土橋渡)

■貞子さんの三回忌を前に入来院家の庭の手入れに参加した。合掌してから梅をたたき切ったり竹を切り倒したり、広さ二坪があかないねとため息をついていたら、かねて知り合いの東郷の山のプロたちが草払い機をはじめ機器持参ではせ参じてくれ、朝の五時半からの作業ですっかりきれいになってしまった。

セイダンの編集も中西、下土橋両氏の奮闘で今年も体裁が整った。片隅でウロチヨロしている間に、人生の達人たちが課題を仕上げてくれる。頭が下がるやら舌を巻くやらの日々は、今年から丸儲けで娯婆遊び(一茶、よっぴやまくだんまっしん)。(渋谷繁素樹)

「炬ばたセイ談」 第9号

炬ばたセイ談会会長

編集担当 中西喜彦・下土橋渡・渋谷繁素樹

事務局 〒895-1402

薩摩川内市入来町浦之名130

入来院重朝方

TEL・FAX 0996-44-3586

印刷 新大同印刷株 (0996-30-1811)



平成25年秋
第9号

〒895-1402

薩摩川内市入来町浦之名 130

炉ばたセイ談事務局